未来の観光人材育成事業

事業実施報告書

令和５年３月

観光庁　参事官（国際関係･観光人材政策）付

目 次

Ⅰ 事業概要 ・・・**2-3**

Ⅱ 観光教育プログラムの実施 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**4-31**
1. 概要 ・・5
2. 加賀市の取組 ・・・6
3. 熊本県の取組 ・・・14
4. アンケート結果（教育・観光関係者向け） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

Ⅲ 成果報告会の開催 ・・・**32-47**
1. 概要 ・・33
2. 実施内容 ・・・37
3. 参加者アンケート ・・45

Ⅳ 令和3年度制作「観光教育プログラム」の改善 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・**48-49**

Ⅴ 総括 ・・・**50-54**
1. 事業の成果 ・・51
2. 事業の課題と解決策 ・・53

Ⅵ 若旅★授業の実施 ・・**55-59**
1. 概要 ・・56
2. 実施内容 ・・・57
3. 総括 ・・59

Ⅰ　事業概要

事業名

未来の観光人材育成事業

事業の目的

今後、観光産業を我が国の成長に資する基幹産業とし、さらに高いレベルの観光立国を目指すためには、人材の育成・確保が不可欠である。そのためには成長の早期の段階から、日本及び地域への愛着と誇りの醸成を図るとともに、旅や観光の意義についての理解を深め、次世代に対して観光への興味・関心を広く喚起することが重要である。

これまで観光庁では、総合的な学習の時間を想定したモデル授業の構築（2017年度）や、教員向けの啓発動画の制作（2018年度）、小中学校の社会科の授業を対象とした観光教育の学習指導案の作成（2019年度）、初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会の開催（2020年度）等を実施してきた。さらに、2021年度には、高等学校向けの観光教育プログラムを開発し、3校で実証を行った。

2022年度は新たに「観光ビジネス」科目が高等学校商業科に導入され、高等学校における観光教育への注目が更に高まっている。高等学校の教育現場において魅力的なコンテンツを提供すると共に、学校だけではなく地域も一体となった観光教育の在り方を検討する必要がある。

本事業では、学校現場において、学外（地域、企業、大学等）とつながりを持ち、指導者の知識やノウハウの有無を問わず、広く、誰もが積極的に観光教育に取り組めることを目指し、教育コンテンツの実践と産学連携の基盤モデル構築を行い、観光立国を支える人材の裾野を拡げることを目的とする。

事業の概要

（１）「観光教育プログラム」を活用したモデル事業

2021年度事業にて開発した観光教育プログラムを活用し、今後、観光教育に取り組みたい地域や学校が参考にできるよう産学連携の基盤を構築し、地域と学校がより協働した学びを提供する取組のモデル事業を行った。

（２）成果報告会の開催、運営

今年度のモデル地域である、加賀市と熊本県の取組内容の共有・発信を通じて、観光教育の更なる普及・発展を目指し、成果報告会を開催した。

（３）事業総括

上記（１）（２）を踏まえ、本事業の成果・課題とそれを解決する方策等を整理し、来年度以降に観光庁及び産学官の各関係者において取り組むべき方向性を、事業総括として報告書に取りまとめた。

（４）若旅★授業の運営

旅や海外経験が豊かな人材を教育機関等へ講師として派遣し、旅の意義・素晴らしさ等を学生に伝える若旅★授業を運営した。実施校は東京都「都立高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事業」を通じて応募があった学校を中心とし、全国各地への波及および運営体制の自走化に向けて、地方での開催も行った。

事業実施期間

令和4年7月19日(火) ～ 令和5年3月17日(金)まで

Ⅱ　観光教育プログラムの実施

1. 概要

公募内容

本事業では学校現場において、学外（地域、企業、大学等）とつながりを持ち、指導者の知識やノウハウの有無を問わず、広く、誰もが積極的に観光教育に取り組めることを目指して、教育コンテンツの実践と産学連携の基盤構築を行うモデル事業を行なった。

以下の公募要領に基づき、実施する地域を広く募集した結果、11件の申請があった。
（公募受付期間：令和4年7月29日（金）～令和4年8月19日（金））

◆ 支援対象事業者の要件
以下の要件を全て満たす者を、本事業の対象事業者とし、高等学校、又は高等学校の同意を得た上で、原則地域側（観光協会、DMO、大学、専門学校、NPO、民間事業者等）が主体となって応募することを条件とした。
なお、次年度以降の自走化を見据えて以下の地域関係者と連携をすることを求めた。
・観光関係者（観光協会、DMO、NPO、民間事業者等）
・教育関係者（教育委員会、学校教員、大学、専門学校等）
・自治体

◆ 支援対象事業（取組内容）について
地域の課題を解決するための取組を推奨するため、下記を要件として挙げた。
・モデル事業において、地域の課題を地域ならではの観光資源を活用して解決する取組であること。
・子どもたちの「地域への愛着と誇りの醸成」や「主体的に地域課題の発見・解決ができる課題解決力を育む」ことを通じて、観光立国を支える人材の裾野を拡げることを目的とした取組であること。
・題材として、「SDGs」や「教育旅行」を取り扱うこととし、「教育旅行」を対象に含める場合には、教育旅行を当該地域に誘致することを想定した企画内容とすること。
・本事業終了以降、今回構築した産学連携の基盤を活用し、継続的に観光教育を実施することを前提とした取組であること。

選定基準・理由

観光教育プログラムにおける地域での観光教育実施のための体制基盤の構築に重点をおいて、以下の観点に基づき審査を行った結果、**一般社団法人加賀市観光交流機構**（加賀市）と**熊本市教育委員会**（熊本県）の申請が採択された。

◆ 選定の観点
①提案内容の的確性
子どもたちの「地域愛の醸成」や「主体的に地域課題の発見・解決ができる課題解決力を育む」とともに、インバウンド対応や観光資源の魅力を自ら発信することができる観光人材の育成を図るモデル事業となり得るか。
②モデル性
他地域への汎用性が高く、観光教育を今後さらに普及・発展させていくための先進事例として相応しい事業か。
③連携体制、主体性
学外（地域、企業、大学等）との協力体制が明確であり、提案者が産学連携の基盤構築を円滑に行い、主体的に観光教育に取り組める体制か。
④計画性
定められた期間内に実証事業を完遂できる具体的な計画が提示されているか。
⑤次年度以降の事業継続性
本事業終了後も、観光教育プログラムの実践継続・自走化が期待できる内容であるか。

2. 加賀市の取組

観光を主要産業とする加賀市において、未来を担う高校生の地域への愛着と誇りを醸成するとともに観光の意義理解を促進することで、若者の地域への定着・地域の観光を支える人材の育成・確保を目指し、事業に参画した。また、高校生の目線で地域の魅力を地域内外に広げ、教育旅行の誘致や地域活性化等との好循環を形成することに取り組んだ。

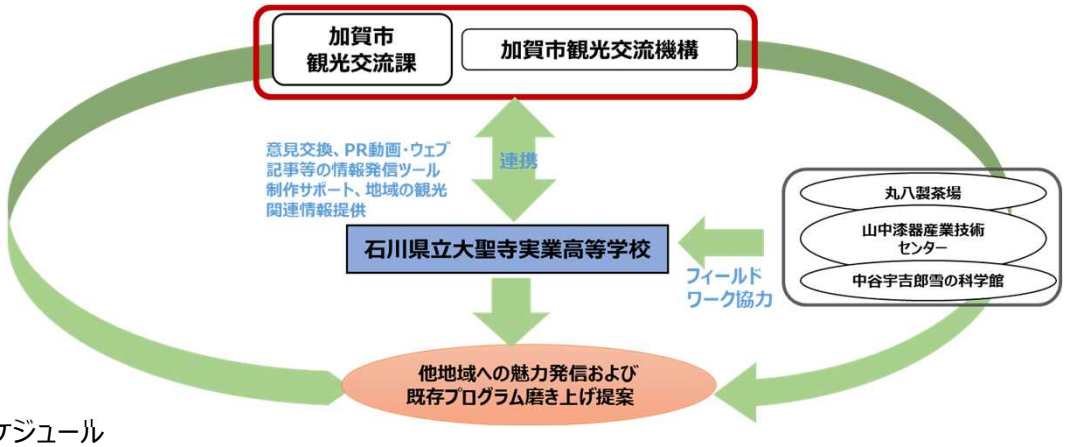
事業（取組）名	加賀市エデュケーショナルツーリズム推進事業～高校魅力化プロジェクト～
事業を実施する市区町村	加賀市
応募主体	一般社団法人加賀市観光交流機構
実施校	石川県立大聖寺実業高等学校

■実施校の概要

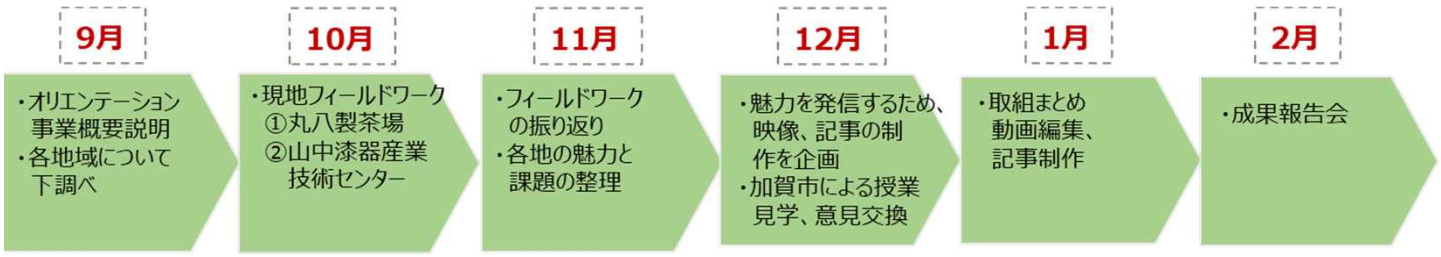
・学科：情報ビジネス科、機械システム科
・生徒：全校生徒約285人(令和5年3月時点)
・進路先：進学70%、就職30%
・参加生徒の学科：情報ビジネス科（3年生）
・参加人数：6名
・授業の枠組：課題研究
・授業の実施日：毎週月曜日11:50-15:15（3コマ）

■実施体制

石川県立大聖寺実業高校を実施校とし、加賀市や加賀市観光交流機構がフィールドワークの調整や、情報提供、授業見学、高校生との意見交換を行い、積極的に学校と地域の連携を図った。



■実施スケジュール



地域課題	これまでの取組（地域）	これまでの取組（学校）
・観光消費単価を増額させるために必要なプログラムの数と質が不足している →高校生の新鮮な視点で情報発信映像を制作することで今後地域が開発するプログラムの参考としたい。 ・観光人材を含む熊本県外への若者の流出	・観光体験メニューの造成検討 ・首都圏への観光PR活動 （主に教育旅行）	・温泉地での温泉水を活用した商品開発や、ご当地デザートの企画

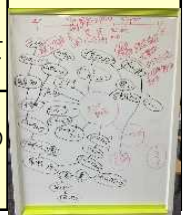
2. 加賀市の取組

活動報告　※活動報告は学校から事務局に提出いただいた資料を基にしています。

実施校である大聖寺実業高等学校では、生徒の興味関心に合わせてグループを分け、課題研究の授業を行っている。本事業は、観光に関心のある生徒が参加した。本事業開始前の1学期には、授業の中で加賀市の温泉について学んだ。夏休み中には、温泉地の魅力を動画にまとめる課題が出されており、1学期から始まっている授業と夏休みの課題との連続性を考慮し、本事業に採択された後の初回・二回目の授業では、夏休みの課題の振り返りと、課題に関連する外部講師との意見交換を行う時間を設けた。本事業の狙いに沿った取り組みは9月26日の三回目の授業から実際に開始した。情報ビジネス科の生徒が授業に参加しており、当初より生徒の関心が高かった映像制作に取り組む中で、地域や観光について学び、地域への理解を深め、身近な魅力を再発見する取組を行った。

②-1 活動報告	**日付**	9月5日	**授業時間**	50分×3コマ（２時間30分）	**令和3年度制作「観光教育プログラム」ワークブック該当項目**
	授業内容	「未来の観光人材育成事業」の事業目的・取組想定内容の説明。本事業に採択される前に、授業の課題として出していた、夏休みの宿題を発表。各自が山中温泉ゆげ街道周辺で撮影した、「周りの方に伝えたい魅力」を動画にまとめ、意見交換を行った。			-
	先生からのコメント・振り返り	情報高校の生徒が関心を持つことが多い、動画制作を手法の一つとして、楽しみながら観光について触れることを目指し、夏休みの課題を出した。実際の発表を見ると、動画の編集がメインとなってしまった印象があった。まず地域を知り、学ぶことに重点を置き、何を魅力と感じたのか、整理することが大切であると感じた。この後始まる事業では、その点を意識しながら授業を進めていきたいと思う。			

②-2 活動報告	**日付**	9月12日	**授業時間**	50分×3コマ（２時間30分）	**ワークブック該当項目**
	授業内容	前回の授業からの続き。本事業採択前の課題に関連して、外部講師を招き、意見交換を行った。VRサイトの運営を手掛けている講師を招き、観光の情報発信をテーマに意見交換を行った。			-
	先生からのコメント・振り返り	前回の授業と同様に、夏休みの課題の整理を行った。次回から未来の観光人材育成事業の授業を本格的に開始するため、生徒達もどのようなことを学ぶのか楽しみな様子。			

②-3 活動報告	**日付**	9月26日	**授業時間**	50分×3コマ（２時間30分）	**ワークブック該当項目**
	使用教材	観光庁制作 令和3年度「観光教育プログラム」ワークブックP11マインドマップ			2-4.考えを整理する
	授業内容	「未来の観光人材育成事業」の事業目的・取組想定内容の説明。 ワークブックP11のマインドマップを活用し、加賀にどのような魅力があるか意見交換を行った。そこで、身近な特産品であるが、文化・歴史的背景を良く知らない「加賀棒茶」や「山中漆器」について知りたいとの意見が生徒から挙がり、今後フィールドワークを実施し、理解を深めることとした。若者からの関心が集まりそうな、写真映りの良い観光地も選択肢に挙がったが、加賀の独自性が確立されているものに着目したいという声が挙がり、伝統的な特産品を題材とした取り組みを行った。			
	先生からのコメント・振り返り	まずは、生徒が加賀市の魅力をどう捉えているのか確認するために、ワークブック内のマインドマップを活用した。想像以上にマインドマップが広がるのに時間がかかり、参加生徒が自分の住む地域がどのような魅力を有しているのか知らないことが良く分かった。また、今後の授業を進める上での題材として、加賀棒茶と山中漆器が候補として挙がり、伝統文化に関心を見せたことは意外であった。			

②-4 活動報告	**日付**	10月3日	**授業時間**	50分×3コマ（２時間30分）	**ワークブック該当項目**
	使用教材	観光庁制作 令和3年度「観光教育プログラム」ワークブックP8コア体験			2-2.コア体験って何?
	授業内容	前回の授業で意見が挙がった加賀棒茶に関して、10月13日に加賀棒茶の生産事業者である丸八製茶場に取材へ行くことが調整できた。丸八製茶場への取材にあたっては、加賀市観光交流課が調整を行った。その準備として、インターネットを活用し、施設の概要と実際の訪問者の感想等を調べ、取材時の質問事項を検討した。また、ワークブックP8のコア体験を活用し、丸八製茶場への理解を深める情報収集を行った。			
	先生からのコメント・振り返り	加賀棒茶の魅力は何であるか、意見を出し合った。フィールドワークで何を聞き出したいか、そのためにどう質問したらよいかについては、考えがまだ整理されていない様子だった。			

②-5 活動報告	**日付**	10月13日	**授業時間**	（1時間30分）	**ワークブック該当項目**
	授業内容	丸八製茶場を訪問し、インタビュー形式で生産者の想いや加賀棒茶の歴史文化を取材。			-
	先生からのコメント・振り返り	近くに住んでおり、日頃加賀棒茶に慣れ親しんでいても、初めて加賀棒茶について学ぶ生徒が多く、「もっと知りたい」、「身近にある地域の魅力を改めて知った」等の声が挙がった。加賀棒茶が対外的に高く評価されていることも学び、地域への誇りも感じた様子。			

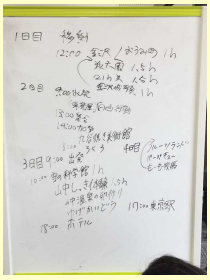
2. 加賀市の取組

②-6 活動報告	日付	10月17日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	観光庁制作 令和3年度「観光教育プログラム」ワークブックP8コア体験			2-2.コア体験って何?
	授業内容	以前の授業で意見が挙がった山中漆器に関して、10月27日に山中漆器の生産事業者である山中漆器産業技術センターに取材へ行くことが調整できた。当該センターへの取材にあたっては、加賀市観光交流課が調整を行った。その準備として、インターネットを活用し、文化や歴史を調べ、取材時の質問事項を検討した。また、ワークブックP8のコア体験を活用し、山中漆器への理解を深める情報収集を行った			
	先生からのコメント・振り返り	山中漆器について下調べをするほど、歴史や文化の深さに気付き、実際に生産に携わっている方がどのような想いで継承活動を行っているのか、関心を持った様子。			

②-7 活動報告	日付	10月24日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材				-
	授業内容	11月6日に開催される「石川県産業教育フェア」で、日頃の取組を発表する機会を得た。このイベントは、産業教育を学ぶ生徒が、一般県民に対し産業教育の実践例を周知することを目的に開催されている。その発表準備を行った。			
	先生からのコメント・振り返り	地域の産業を学ぶ情報高校として、日頃の授業で、加賀市の観光客数を取り戻すために、マルチメディアを誘客に活用する方法について学んでいる。本事業では、加賀市の観光産業や歴史文化を学んでいるので、その取組経過も発表に含めることとした。			

②-8 活動報告	日付	10月27日	授業時間	1時間	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし　※フィールドワーク			-
	授業内容	山中漆器産業技術センターを訪問し、インタビュー形式で生産者の想いや山中漆器の歴史、文化を取材。			
	先生からのコメント・振り返り	山中漆器は加賀市民にとっては馴染みのあるものであるが、どのような特徴があるかなど詳しく知らない生徒が多かったため、山中漆器産業技術センターを訪問した。歴史や地域との関わりに関して、職人の想いを直接聞く機会もいただけ、地域の伝統文化への関心がより高まった様子であった。			

②-9 活動報告	日付	11月6日	授業時間	1日	授業の様子
	使用教材	なし			
	授業内容	石川県産業教育フェアで、地域の産業を学ぶ情報高校として、加賀市の観光客数を取り戻すための取組をテーマに発表を行った。			
	先生からのコメント・振り返り	マルチメディアを誘客に活用する方法が主なテーマであったが、本事業での学びについても発表に含めた。産業教育フェアに訪れた外部の方にも、本事業の取組に関心を寄せていただき、お声かけいただく場面もあった。参加生徒にとって、学びをアウトプットする練習ができ、自信に繋がる、学びの多い時間となった。			

②-10 活動報告	日付	11月7日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	授業の様子
	使用教材	なし			
	授業内容	本事業参画前からエントリーしていた「観光甲子園」において、準決勝進出が決まったため、本事業における取組とも関連させながら準備を行った。 ※観光甲子園・・・一般社団法人NEXTTOURISMが主催する、全国の高校生がSDGs思考で観光事業計画を競うコンテスト。大聖寺実業高校が参加した「SDGｓ修学旅行」部門では、地元が舞台の修学旅行プランを策定、提案する。			
	先生からのコメント・振り返り	加賀市が抱える課題を整理し、教育旅行という記憶に残るイベントを加賀市で行ってもらう企画を提案することを目指し、意見交換を行った。加賀市内の各観光施設の場所や入場料等を詳細まで調べ、企画を実現する上での障壁となる要素がないかについても検討を行った。多角的に企画を詰めることで、生徒の提案がより具体化したと考える。			

2. 加賀市の取組

②-11 活動報告	日付	11月21日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	観光庁制作 令和3年度「観光教育プログラム」ワークブックP11マインドマップ			2-4.考えを 整理する
	授業内容	①丸八製茶場と②山中漆器産業技術センターへのフィールドワークの気付きや学びを振り返り。9/26に実施したワークブックP11のマインドマップを再度使用し、加賀の魅力をテーマに考えを整理した。			
	先生からの コメント・ 振り返り	フィールドワーク後の2回目となり、2か月前よりもマインドマップの項目が増え、より具体的な内容となった。生徒が多角的に物事を考えられるようになってきていると感じた。			

②-12 活動報告	日付	12月5日	授業時間	50分	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			-
	授業内容	加賀市及び日本旅行の事業担当者と意見交換会を行った。加賀市の魅力、観光を学んで感じたことを中心に意見を交わした。			
	先生からの コメント・ 振り返り	高校生にとって大人と意見を交わすことは少ないので貴重な体験だった。また、今回の授業参加をきっかけに、加賀市で現在作成を進めている、加賀市における教育旅行のワークブックに本校の生徒の意見を取り入れることとなった。地域とのつながりが生まれ、大変有意義な意見交換会であったと考える。			

②-13 活動報告	日付	12月12日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			-
	授業内容	10/27に実施した山中漆器産業技術センターの振り返りと情報発信の映像制作に向けて企画・編集を開始した。また、加賀市教育旅行ワークブック制作協力に関連して、雪の科学館や北前船資料館について調べた。			
	先生からの コメント・ 振り返り	フィールドワーク時に感じたことと、11/21に実施したマインドマップでの情報整理を合わせて、山中漆器産業技術センターの振り返りを行った。また、12/5に加賀市と意見交換を実施したことで、教育旅行ワークブック制作に参加できることとなり、その素材について、インターネットを活用してウェブサイト等を確認し、学習を行った。加賀市が有する様々な観光資源について、勉強することができ、生徒の視野が広がった様子が見られた。			

②-14 活動報告	日付	12月19日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	12/12に企画・編集した山中漆器産業技術センターの情報発信の映像を学内の先生に見てもらい、振り返りを行う時間を設けた。同じく、情報発信の一つの手法として活用することとした、記事制作にも取り掛かった。記事は地域内外の方に発信するために、株式会社日本旅行が運営する旅の情報サイト「Tripa」にて掲載予定。			
	先生からの コメント・ 振り返り	制作映像を授業外の先生に見てもらうことで、自信がついた様子。また、別の制作物にも取り組み始めたことで、学びを振り返り、アウトプットする流れの習慣がついてきたと考える。			

②-15 活動報告	日付	1月14日	授業時間	1時間	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし　※フィールドワーク			-
	授業内容	雪の科学館へフィールドワーク・館内を見学。 フィールドワークは、加賀市観光交流課が調整を行った。			
	先生からの コメント・ 振り返り	初めて人工雪を作ることに成功した中谷宇吉郎を記念した「雪の科学館」。初めて雪の科学館を訪問する生徒も複数おり、雪にまつわる随筆や映画、絵などに加え、雪氷に関する実験の実演・体験も行うことができた。加賀市の住民にとって身近な存在の「雪」を、様々な側面から見ることができ、発見があった様子。			

2. 加賀市の取組

②-16 活動報告	日付	1月16日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			2-4.考えを 整理する
	授業内容	1/14に訪問した「雪の科学館」での気付きを整理した。 1/18に予定されている、石川県教育委員会主催の「専門高校等における産学連携人材育成事業」の取組発表会のため、発表準備を行った。			
	先生からの コメント・ 振り返り	フィールドワークでの学びの振り返りを行った。また、石川県教育委員会主催「専門高校等における産学連携人材育成事業」にも参画しており、本事業の取組も一部取り上げるため、今までの取組を通じての気付きについて、意見交換を行い、プレゼン資料にまとめた。			

②-17 活動報告	日付	1月18日	授業時間	1日	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	石川県教育委員会主催「専門高校等における産学連携人材育成事業」の取組発表会に参加した。			
	先生からの コメント・ 振り返り	現在制作を進めている情報発信の映像制作に至るまでの経緯や、学びについて紹介した。今後は情報高校の取組として、加賀市内を案内する高校生・観光ガイドの育成を検討しているため、本事業での取り組み内容と合わせて、紹介した。			

②-18 活動報告	日付	1月23日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	制作中の加賀市における教育旅行のワークブック			2-4.考えを 整理する
	授業内容	観光庁・加賀市・事務局が授業に参加した。12/5に加賀市と意見交換を行った際に連携することが決まった、教育旅行のワークブックに関連して、山中地域のおすすめスポット3つの決定を行った。1人1台インターネット端末を用い、教員からの投げかけ（高校生が選ぶ店トップ３を決める）に対し、インターネット検索を活用しながら、議論を行った。			
	先生からの コメント・ 振り返り	山中地域のおすすめスポットの意見出しでは、加賀にしかないご当地グルメ等のアイデアもあり、独自性を意識した発言も見られた。教育旅行ワークブックで取り上げる観光地についても、活発に意見交換をしていた。今までの授業で加賀市の観光資源を各所で学んできたことから、参加生徒の考えが整理されてきた様子が見られた。			

②-19 活動報告	日付	2月6日	授業時間	50分×3コマ（２時間30分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			-
	授業内容	授業の最終振り返り			
	先生からの コメント・ 振り返り	これまでの授業を振り返り、地域内外に向けて加賀市の魅力を発信していきたいという気持ちが生徒に芽生え、観光に対する関心が増していることが感じられた。本事業を通じて、身近な魅力を再発見し、加賀市をより良くしていきたいという想いが生まれたようだ。事業に取り組んだ成果が確認できたと思う。			

②-20 活動報告	日付	2月16日	授業時間	2時間	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	本事業の成果報告会にて、これまでの取り組みを発表した。			
	先生からの コメント・ 振り返り	9月からの授業の集大成として、成果報告を行った。本事業には、3年生が参加しており、全国各地からの視聴者に向けて、今まで取り組んできたことを共有する機会をいただけたことは、自信に繋がり、今後の進路にも役立つ場となったように思う。また、熊本の参加者の意見も聞くことができ、別の地域においても同世代が地域振興に励んでいる様子を見ることは、刺激になったことと考える。			

2. 加賀市の取組

本事業を通して、自分たちの地域を調べ、実際にフィールドワークを行うことで、新たな視点を持ち、地域の魅力を再発見することができた。加賀市や加賀市観光交流機構が授業進行のサポートを行い、地域内外に加賀市の魅力を発信するための映像や記事を企画・制作した。授業に参加した生徒が自ら制作したことで、高校生の若い視点を取り入れることができ、加賀市においてはホームページへの動画掲載などを通し、教育旅行の誘致に役立てられることが検討されている。高校生の取組や学びが可視化され、地域にも還元されることで、継続的な観光教育の推進が期待できるとともに、学校教育と地域観光の活性化の好循環が図られた好事例といえる。

授業の取組の中で実際に制作した動画と記事は下記の通り。

（1）動画

授業の中で加賀市の魅力について意見交換を行った結果、加賀市を代表する生産物である加賀棒茶と伝統工芸品の山中漆器を題材としてPR動画にまとめることとした。

・加賀棒茶（取材先：丸八製茶場）

・山中漆器（取材先：山中漆器産業技術センター）

（2）記事制作

フィールドワークの後、加賀の魅力発信をテーマに考えを整理し、地域内外へ教育旅行の誘致に役立つ情報として発信することを目指し、記事を企画・制作した。なお、高校生が執筆した記事は、高校生の目線で加賀市内の魅力的な観光地を紹介する内容であり、株式会社日本旅行が運営する旅行情報ウェブメディアである「Tripa（トリパ）」に掲載した。

2. 加賀市の取組

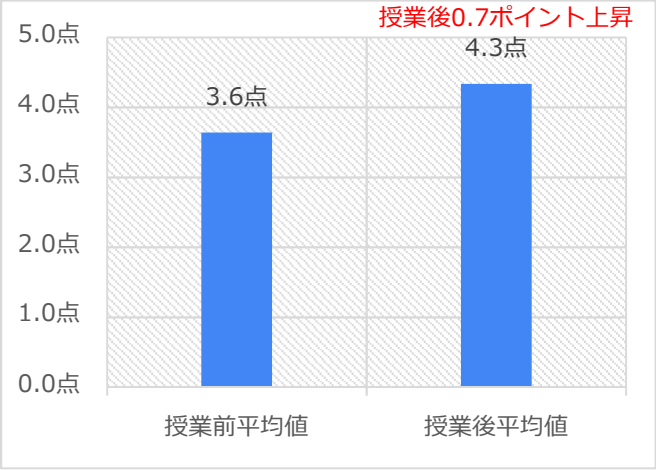
授業前後アンケート結果比較(加賀市・大聖寺実業高校3年生)

回答者数：授業前11名、授業後6名

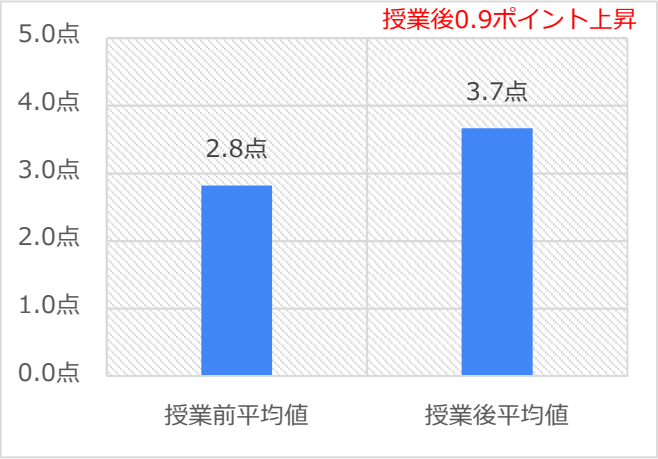
※授業前アンケートは課題研究の授業に参加する全生徒を対象にアンケートを実施したが、5名は別の内容で活動することになった。
したがって、授業後アンケートは本事業に参加した6名の生徒のみを対象に実施した。

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

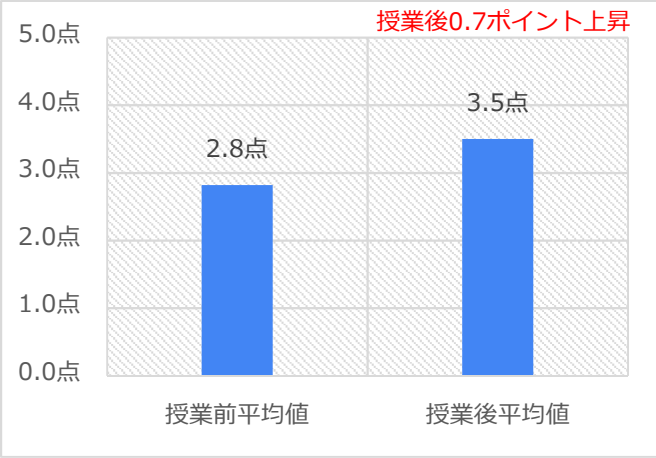
（1）加賀市に「自分のまち」としての愛着を感じている



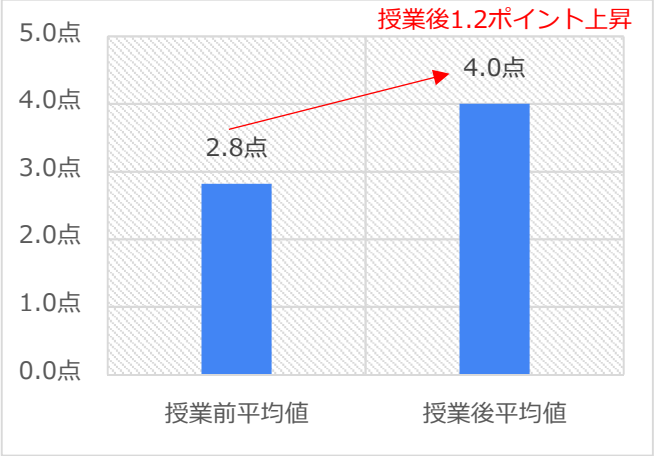
（2）加賀市に住み続けたい／通学し続けたい



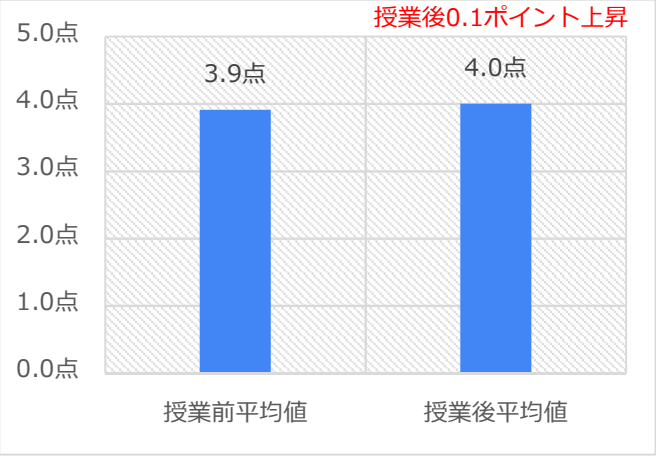
（3）加賀市の観光の魅力について学びたい



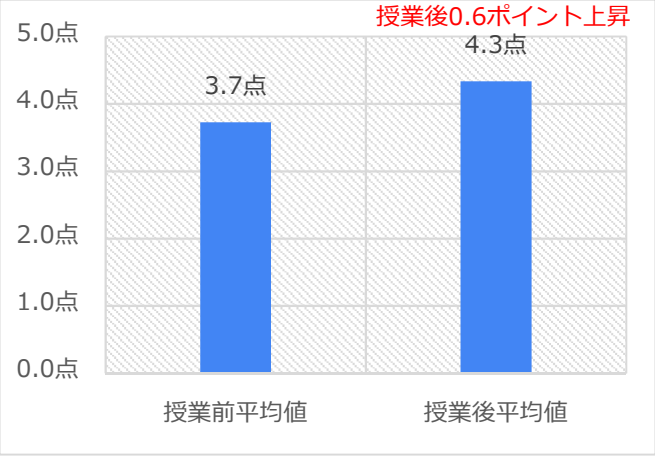
（4）加賀市の魅力を周りの人にも勧めたいと感じている



（5）加賀市に観光の魅力があると思う



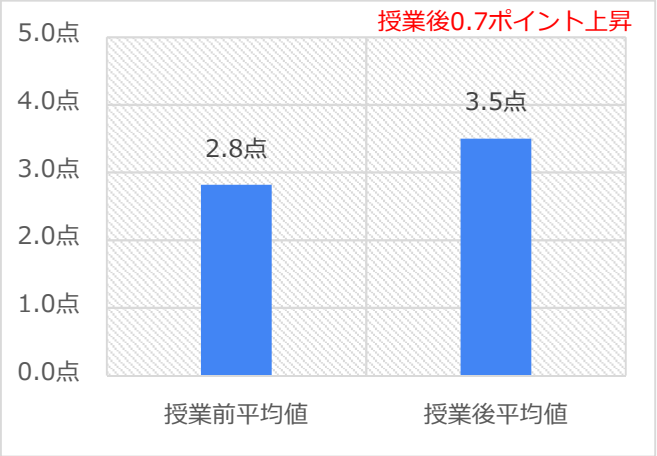
（6）加賀市にもっと観光客が訪れてほしいと感じている



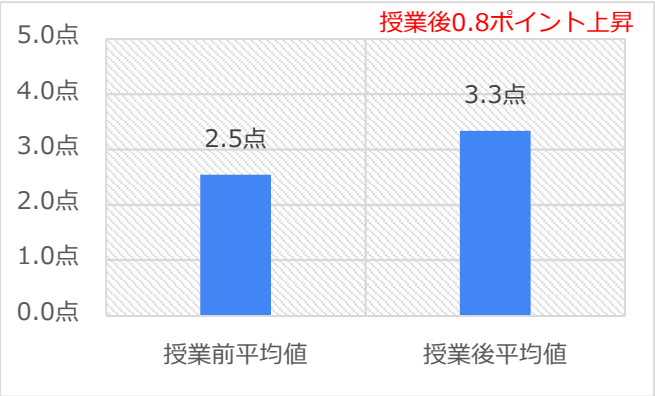
2. 加賀市の取組

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

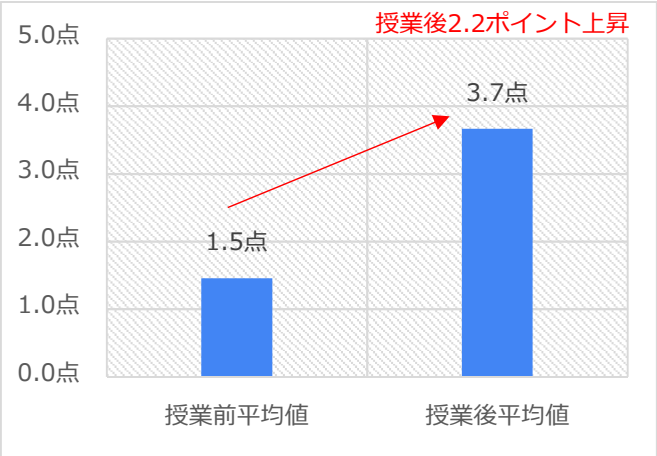
（7） 地域の観光産業について理解を深めたい



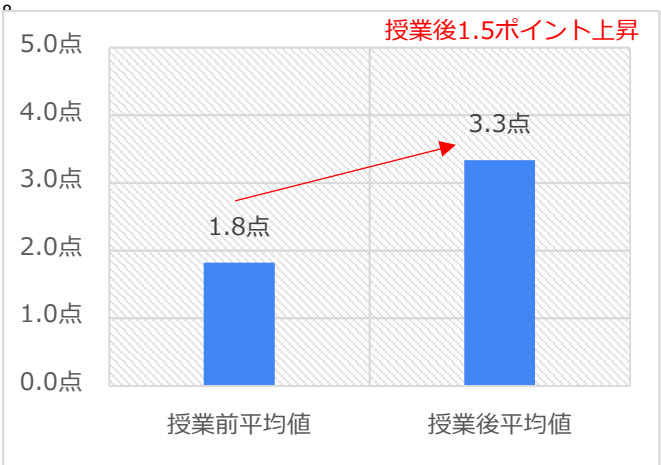
（8）地域の観光資源を活用する取り組みやイベントに参加したい



（9）高校を卒業した後、観光に関する大学・短大・専門学校等でさらに観光を学びたい



（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。



考察

すべての設問において、回答の平均値は上昇しており、本事業を通して地域への愛着や誇りをこれまで以上に感じ、観光への興味・関心が高まったことが、授業前後のアンケートを比較することで確認できた。特に、「（9）高校を卒業した後、観光に関する大学・短大・専門学校等でさらに観光を学びたい」は2.2ポイント、「（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。」は1.5ポイント上昇していた。本事業における加賀市の参加生徒は3年生であったことが影響したと推測され、観光に関する学びや観光産業への就職が現実的に進路選択の一つとして検討されたと考えられる。また、「（4）加賀市の魅力を周りの人にも勧めたいと感じている」についても1.2ポイントと伸び率が高く、授業を通して地元加賀市の魅力を参加生徒が再発見し、地域への愛着と誇りが醸成されたことが伺える。

しかしながら、「（5）加賀市に観光の魅力があると思う」」は0.1ポイントの上昇に留まり、全設問の中で最も変化が見られなかった。この要因として、加賀市の観光における課題（交通アクセスの不便さ等）が挙げられ、誘客を行うことに対して障壁を感じた可能性が考えられる。一方で、課題を発見し理解することは、観光地域づくりを推し進めるために必要な素質である「課題解決力」を養うことに繋がる。また、高校生ならではの視点をもち、地域と課題を共有し、改善策を提案し続けることで、高校生が未来の観光地域づくりの一員となると思われる。

3. 熊本県の取組

熊本県では平成28年4月の熊本地震や令和2年7月の豪雨による球磨川水域災害が発生し、観光産業においては長期間の休業等により人材の流出が進んでいる。こうした背景から、将来、地域における観光を担う若い世代の育成を図ると共に、観光客誘致の取組を進めていくことを目指し、本事業に参画した。実施校は2校であり、熊本市立必由館高等学校では人吉市・球磨村における豪雨災害、熊本市立千原台高等学校では阿蘇市における熊本地震について学び、観光による復興、地域活性化について理解を深めた。これらの学びを基に、他地域への魅力発信および教育旅行のプラン造成に取り組んだ。

事業（取組）名	高校生と取り組む被災地の創造的復興～熊本版レスポンスツーリズムの幕開け～
事業を実施する市区町村	熊本市・阿蘇市・人吉市・球磨村を中心に熊本県全域
応募主体	熊本市教育委員会
実施校	熊本市立必由館高等学校 /熊本市立千原台高等学校

■実施校の概要

①熊本市立必由館高等学校

・学科・コース：普通科(普通、国際コース、芸術コース、服飾デザインコース)
・生徒：全校生徒約1,055人(令和5年3月時点)
・進路先：進学90%　就職10%
・参加生徒の学科：普通科（1年生）
・参加人数：12名
・授業の枠組：総合的な探究の時間
・授業実施日：毎週金曜日15:25-16:15（50分）

②熊本市立千原台高等学校

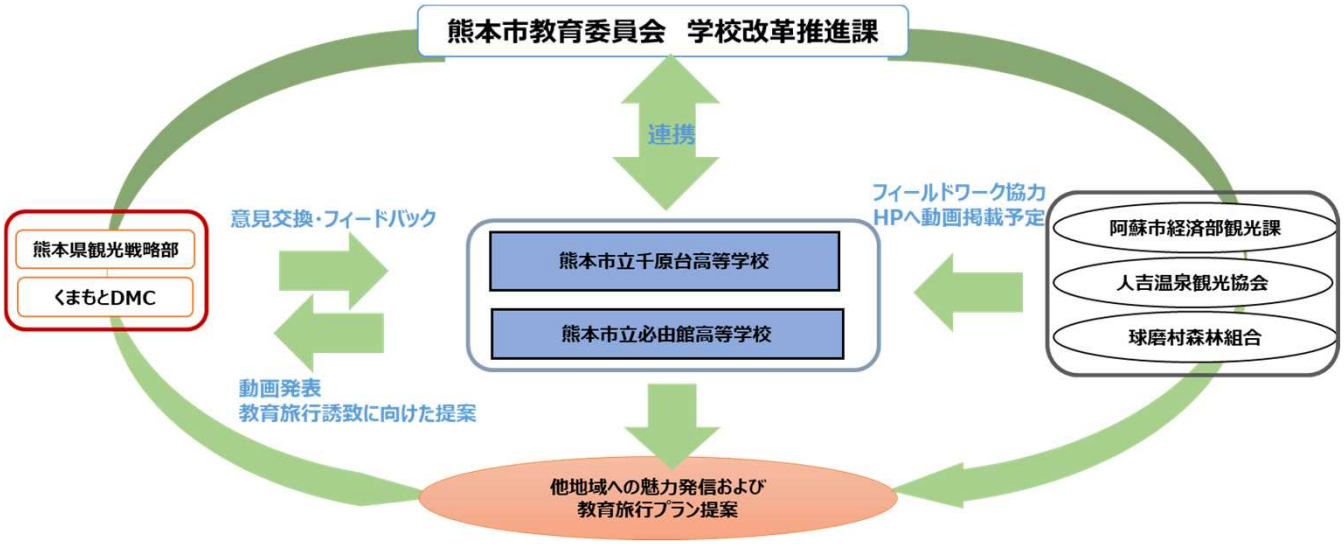
・学科・コース：普通科(体育コース・国際経済コース)、情報科（会計コース・経営情報コース)
・生徒：全校生徒約600人(令和5年3月時点)
・進路先：進学70%　就職30%
・参加生徒の学科：普通科（1・2年生）
・参加人数：9名（1年生3名、2年生6名）
・授業の枠組：課外授業
・授業実施日：週に1日1時間と土日の活動

地域課題	これまでの取組（地域）	これまでの取組（学校）
・災害発生にともなう観光入込客数の減少 ・観光人材を含む熊本県外への若者の流出	・防災学習プログラム造成 ・阿蘇におけるジオガイドの育成と新しいプログラム開発	・観光業を志す大学生を誘致し。これからの熊本県の観光について議論

3. 熊本県の取組

■実施体制

熊本市立必由館高等学校と熊本市千原台高等学校を実施校とし、両校におけるサポートを熊本市教育委員会が担った。地域の行政や観光事業者等と連携し、高校生との意見交換や制作した動画および地域観光の改善提案に対するフィードバック等を行い、積極的に地域内の連携を図った。



■実施スケジュール

①熊本市立必由館高等学校

10月
- オリエンテーション
- 地域の観光の魅力について下調べ
- 外部講師による講話
- 現地フィールドワーク

11月
- フィールドワーク先の魅力や課題の再整理
- フィールドワークの旅程を教育旅行のモデルコースとしてブラッシュアップ

12月
- ターゲットとテーマを設定し魅力を発信するための観光PR動画を制作
- 授業内で観光PR動画を発表し合う
- 観光PR動画の再編集

1月
- 取組のまとめとして提案書の作成
- 成果報告会のプレゼン準備

2月
- 成果報告会

②熊本市立千原台高等学校

9月
- オリエンテーション
- 地域の観光の魅力について下調べ
- 外部講師による講話
- 現地フィールドワーク①
- 魅力を発信するための観光PR動画の編集

10月
- フィールドワーク先の魅力や課題の再整理
- 現地フィールドワーク

11月
- これまでの振り返り
- アイディアの実現性について検討
- フィールドワークの旅程を教育旅行のモデルコースとしてブラッシュアップ

12月
- 観光PR動画に対する意見交換
- くまもとDMCに取組発表と企画提案

1月
- 動画編集
- アイディアのブラッシュアップ
- 取組のまとめとして提案書を作成

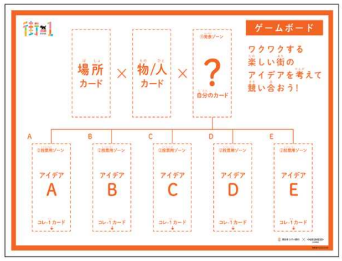
2月
- 成果報告会

3. 熊本県の取組

活動報告（必由館高校）　※活動報告は学校から事務局に提出いただいた資料を基にしています。

実施校である必由館高等学校は、地域課題の解決や地域住民との交流を通じて生徒が「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を培うことを目的として、総合的な探究の時間で授業を実施した。実施にあたっては、熊本市教育委員会の教育審議員が継続的に関わりをもち、授業のサポートを行った。学校内での授業に加えて、フィールドワークを通して地域や観光関係者と関わることで活動対象地域である人吉・球磨の魅力を発見し地域内外に向けて発信した。なお、同校は本事業開始前の1学期にも人吉・球磨の観光資源について学んでいたが、本事業の狙いに沿った取り組みは10月21日の授業から開始した。

②-1 活動報告	**日付**	10月21日	**授業時間**	50分×1コマ（50分）	**令和3年度制作「観光教育プログラム」ワークブック該当項目**
	使用教材	人吉・球磨に関する観光パンフレットやイベントチラシ			1.テーマとスケジュールをきめる
	授業内容	熊本市教育委員会より、今回の取組のテーマである「高校生と取り組む被災地の創造的復興～熊本版レスポンスツーリズムの幕開け～」に込められた地域課題や、フィールドワーク先として設定をした人吉・球磨の観光情報を伝える。その後、人吉・球磨についての現状の知識や情報を整理し、フィールドワーク時の行程を作成した。 ※レスポンスツーリズム＝ 観光客自身が「ツーリズムを構成する重要要素の一つ」と捉え、自身の行動が地域や環境へ負荷を与えてしまうかもしれないことを認識し、より良い観光地形成を行っていこうという考え方。			
	先生からのコメント・振り返り	熊本市で育った生徒が多く、同じ熊本県ではあるが人吉・球磨の観光地について全く知らない生徒も多かった。今日は初回授業であったが、自分たちの住む熊本市以外の魅力について学ぶいい機会となり、自地域以外にも興味・関心をもつきっかけとなる授業であった。			

②-2 活動報告	**日付**	10月29日	**授業時間**	1日	**ワークブック該当項目**	**授業の様子**
	使用教材	街-1カード （株式会社西日本シティ銀行と株式会社九州博報堂が共同開発した、カードゲームを使って楽しく遊びながら、自分たちの街のことや社会の特徴を学び、SDGsについても触れることができるもの）			2-3.地域を知ろう	※街-1カード
	授業内容	本事業開始前ならびに前回10月21日の授業で整理した人吉・球磨の課題や魅力について発表する場として、『Go Green プロジェクト in 熊本』に参加した。これは市立高等学校・専門学校改革基本計画の一環として普通科改革に取り組む熊本市教育委員会より、普通科での実践的な取組を広める目的から声掛けをいただいたことで参加が実現した。このイベントは自然環境に配慮し、地域経済に貢献した新たな観光プログラムを造成し、国内外へ発信することを目的としており、「熊本県の高校生が考える観光復興」をテーマに熊本市立千原台高等学校の生徒とパネルディスカッションを行った。その後、人吉・球磨エリアに移動し、人吉・球磨豪雨水害の被害を受けた農村レストランの代表から復興に対する想いを伺った。また、ホテルでは、SDGsの発想力を身に着けることを目的として開発された街-1カードを用いて、人吉・球磨の観光地域づくりについてSDGsの視点を取り入れたアイディア出しを行った。 ※Go Green プロジェクト in 熊本・・・ 熊本県・(公社)熊本県観光連盟・事務局である株式会社日本旅行が主催する。被災観光地の創造的復興を目指し、自然環境に配慮し、地域経済に貢献した新たな観光プログラムを造成し、国内外へ発信することを目的としている。				
	先生からのコメント・振り返り	街-1カードを使用することで、固定観念にとらわれない観光地域づくりのアイディアが出た。カードゲーム感覚で楽しく、SDGsについても触れることができた。				

②-3 活動報告	**日付**	10月30日	**授業時間**	1日	**ワークブック該当項目**
	使用教材	なし　※フィールドワーク			2-3.地域を知ろう
	授業内容	・既存の防災学習プログラムを活用し、人吉・球磨豪雨水害で被災したホテルサン人吉代表の講演を聞いた。施設内の水害対策や自然環境に配慮したSDG s の取組について、実際に施設を見学しながらお話しを伺い、自然と共生した持続可能な観光の実践例を学んだ。 ・球磨村森林組合を訪問し、球磨村の主要産業である林業の仕事におけるSDGsの取り組みを学んだ。 ・球泉洞の見学と球磨川下りに参加し、自然の恵みを体感した。 ・観光PR動画制作の素材として各ポイントで動画撮影を行った。			
	先生からのコメント・振り返り	実際に人吉・球磨エリアを訪問したことで、自分の目で見て、感じて、考える、非常に有意義な時間を過ごすことができ、改めて人吉・球磨の魅力に気づくことができたと思う。特に普通科に通う生徒であるため、学外に出て、地域と連携した学びを行う機会は少ないので、非常に貴重な機会だったと感じている。			

3. 熊本県の取組

②-4 活動報告	日付	11月4日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	観光庁が令和3年度に制作した「観光教育プログラム」ワークブックP11			2-4.考えを整理する
	授業内容	マインドマップを用いて、人吉・球磨でのフィールドワークで学んだことや感じたことを整理した。			
	先生からのコメント・振り返り	「観光教育プログラム」ワークブックP11のマインドマップを活用して、フィールドワークでヒアリングした内容や得た情報を整理した。書くことで、何が心に残り、どこをおすすめしたいのかをまとめることができた様子。			

②-5 活動報告	日付	11月11日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			2-5.観光コンテンツを考えよう
	授業内容	事務局よりお声がけをいただき、これまでの学びを発表するための機会として、持続可能性を議論しネットワークを広げる場である『第7回サステナブル・ブランド国際会議2023（予選）』に参加することを決めた。予選参加登録に必要な資料は論文と提案書であり、今回は論文作成を行った。論文のテーマは、「レスポンスツーリズム」とし、本事業内で行った人吉・球磨のフィールドワーク行程と体験プログラムを文章で整理し提出した。 ※サステナブル・ブランド国際会議・・・ 株式会社博展が主催し、企業や自治体、NPO/NGO、教育機関などからの参加者が集う国際的コミュニティ・イベントである。なお、持続可能性を議論し参加者同士のネットワークを広げることを目的としている。			
	先生からのコメント・振り返り	フィールドワークを通して得た情報や気づいたこと、地域の魅力を他の人にも知ってもらいたいと感じる生徒が多かったので、生徒にとっても発表の場を設けることは非常に有益であったと考える。ただ、今回の参加生徒は1年生であり、初めての論文作成となった生徒が多かったので、なかなか文章化するのが難しい様子だった。論文の書き方をもう少し丁寧に説明すべきだったように感じている。			

②-6 活動報告	日付	11月18日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			2-5.観光コンテンツを考えよう
	授業内容	『第7回サステナブル・ブランド国際会議2023（予選）』に参加するにあたって、論文の他にもう1つ提出が必要な提案書の作成を行った。提案内容はフィールドワークの行程をブラッシュアップするとともに、SDGsの観点を取り入れながら、人吉・球磨への教育旅行誘致に向けた観光プランとしてまとめた。			
	先生からのコメント・振り返り	前回授業では論文を作成したが、今回の授業では提案書を作成することで、観光プランを提案する際のストーリー立てや構成がさらに整理された印象を受けた。また、地域の観光資源を守ることにつながるレスポンスツーリズムの意義についても深く考えることができた。			

②-7 活動報告	日付	12月2日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			3.セグメントを考える
	授業内容	マインドマップや論文、提案書の作成を行うことで、人吉・球磨の魅力的な観光コンテンツは何か整理ができたため、情報発信のステップに入ることにした。そこで、熊本市教育委員会の審議員と繋がりのある外部講師（映像クリエイター）から動画編集に関する知識や動画制作ツールの操作方法を教えてもらった。そして、フィールドワーク時に撮影した画像や動画を基に、編集に取り掛かった。			
	先生からのコメント・振り返り	熊本市教育委員会を通じ、外部講師としてプロの映像クリエイターの派遣を依頼した。どのような構成であれば地域の魅力を訴求できるかポイントを教えていただいたことで、伝えたいことを伝えるための技術を習得することができ動画制作に対する意欲が湧いていた。			

②-8 活動報告	日付	12月9日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			3.セグメントを考える
	授業内容	前回授業の振り返りとして、人吉・球磨を観光地としてPRするために、何を動画の柱にしていくのか議論し、動画制作を進める。			
	先生からのコメント・振り返り	人吉・球磨の魅力を若い世代にも知ってもらいたいという思いから、教育旅行のプラン造成と同様にターゲットは同年代の高校生とした。フィールドワークで撮影した写真や動画の素材を厳選し、ストーリー性のある動画となるように工夫をすることで、動画を観た人が人吉・球磨に行きたくなるように、考えながら取り組んでいた。			

3. 熊本県の取組

②-9 活動報告	日付	12月16日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			4.実証事業を やってみる
	授業内容	制作した動画を熊本市教育委員会と事務局に向けて中間発表を行い、フィードバックをもとに動画をブラッシュアップした。			
	先生からの コメント・ 振り返り	楽しい体験プログラムの紹介パートは明るいBGMにすることや、人吉・球磨の方々が復興に取り組む姿など特に訴えたいメッセージを整理する必要性など、フィードバックを受けた内容をもとに、再度、観光PR動画の内容を検討した。			

②-10 活動報告	日付	1月13日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	完成した動画をもとに、6回目の授業で作成した提案内容を成果報告会で使用するプレゼン資料としてブラッシュアップした。			
	先生からの コメント・ 振り返り	人吉・球磨で何が印象に残ったのか、何を伝えれば同世代の旅行者が人吉・球磨を訪れるか再度検討し、SDGsの観点を取り入れた教育旅行の提案をプレゼンの内容として整理した。			

②-11 活動報告	日付	1月18日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	成果報告会に参加するための練習としてプレゼン発表を行い、教員よりフィードバックを行った。			
	先生からの コメント・ 振り返り	実際に声にだして伝えようとすることで、緊張からか思っていたよりも気持ちをのせた発表をすることができず危機感を覚えた様子が見え、一生懸命練習をしていた。その結果、なるべく原稿を見ずに自分の言葉で人吉・球磨に訪れてほしいという想いを伝える発表が徐々にできるようになった。			

②-12 活動報告	日付	1月21日	授業時間	90分	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	熊本市教育委員会が主催し、豊かな人生とよりよい社会を創造するために自ら考え主体的に行動できる人を育むことを目的としたKumamoto Education Week 2022-23の取り組みの一環として催された「どぎゃん！高校改革～高等学校の今と未来～」に参加した。これまでの取り組みを踏まえて、人吉・球磨の新たな教育旅行プランを提案した。その後、登壇者から助言をいただいた。			
	先生からの コメント・ 振り返り	登壇者であった大学の先生等、多様な関係者にフィードバックをいただき、提案内容をブラッシュアップするいい機会となった。2月16日に開催される成果報告会では、提案内容に対する理由を明確に、生徒が気づいた人吉・球磨の魅力を最大限発信できることを期待する。			

②-13 活動報告	日付	2月16日	授業時間	2時間	ワークブック 該当項目
	使用教材	なし			6.プレゼンする
	授業内容	観光庁の主催する成果報告会にて、本校のこれまでの取り組みを発表した。			
	先生からの コメント・ 振り返り	配信会場にて発表者となる生徒2名が成果報告会に参加。1年生でありながらもプレゼンに果敢に取り組み、生徒自身にとっても自信につながったと思う。また、人吉・球磨に関する提案を全国に向けて発信できたことがうれしかったようなので、今後も観光に興味をもって調べたり、現地に赴くなど、積極的に活動してくれることを期待する。			

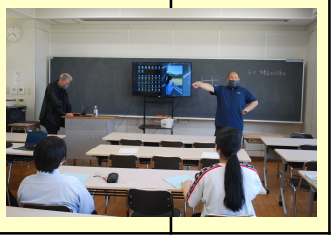
3. 熊本県の取組

活動報告（千原台高校）　※活動報告は学校から事務局に提出いただいた資料を基にしています。

実施校である千原台高等学校は、課外授業において本事業に取り組んだ。学年の枠を超えて1・2年生が参加し、担当教科を横断して4名の教員が携わった。授業ごとに振り返りと次回の活動内容をディスカッションし、生徒の興味・関心に合った授業を行い、フィールドワークを通して地域や観光関係者と関わることで活動対象地域である阿蘇の魅力を発見し地域内外に向けて発信した。なお、本事業の目的に沿って2学期から授業を開始するため、夏休み中に阿蘇の観光プランを考えてくるよう生徒に課題を出し、9月2日から授業を開始した。

②-1 活動報告	日付	9月2日	授業時間	50分×1コマ（50分）	令和3年度制作「観光教育プログラム」ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			1.テーマとスケジュールをきめる	
	授業内容	・生徒には事前に取組内容を説明し、「阿蘇の観光プランを各自で考える」ことを課題にしており、考えてきたことを発表してもらった。 ・発表会後、自分ゴトとして考えやすい「高校の修学旅行生」をターゲットとして旅行プランを検討することにした。 ・旅行プランをつくる上では地理的位置を把握することが重要であることや、ターゲットにした高校生は交通手段が限られるということを考慮し、近場の観光資源をどのようにプランに盛り込むかという視点の重要性を確認した。 ・旅の要素である「学ぶ」「経験する」「繋がる」「味わう」「関わる」「憩う」等の観点から、自分たちが魅力だと感じる観光資源を分類する作業を行った。				
	先生からのコメント・振り返り	プランニングの難しさや、阿蘇の魅力をよく理解していないことを自覚する良い機会になった。他校で旅行プランや観光コンテンツを作成した取組動画がウェブサイトに掲載されていたので、それを見せてイメージを持たせることを検討したい。				

②-2 活動報告	日付	9月5日	授業時間	20分×1コマ（20分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	平成30年度第31回熊本県高等学校生徒商業研究発表大会動画			2-1.観光コンテンツのコア体験を考えよう	－
	授業内容	熊本県立球磨中央高等学校「持続可能な社会を目指して～今、私たちにできること～」と熊本県立熊本商業高校「横の『繋がり』から縦の「繋がり」へ　～継続可能な取り組みを目指して～」と題して取り組んだ、商業的テーマの研究活動内容の発表動画を視聴				
	先生からのコメント・振り返り	2校の取り組みを視聴したことで、自分たちがどんな取り組みをしていくべきなのか、具体的にイメージすることができたようである。とても参考になった一方で、他校の取り組んだレベルまで自分たちの学びを深められるかという不安も出た。				

②-3 活動報告	日付	9月9日	授業時間	60分×1コマ（60分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			－	
	授業内容	観光入込数が減少している地域課題を受けて、教育旅行先を阿蘇とする高校を増やすことで解決の一助となるよう、情報発信を行うこととした。なお、ツールは、高校生に馴染みの深い動画を選択することで、高校生に情報が届くようにする。そこで、映像クリエイターをしている卒業生に担当教員から連絡を取り、映像制作に関する講師を依頼した。映像づくりのための素材集めに関するポイントをレクチャーしてもらった。 【授業の流れ】 ①生徒が以前撮影した「高校生の放課後」をテーマとした映像を講師に見ていただき、当事業での映像制作に向け、良い点、改善点等のアドバイスをいただく実技研修を行った。 ②質疑応答時には、高校生に訴えかけるような映像作品にするためには尺はできるだけ短く、最初のインパクトが大事である、等のアドバイスを得ることができた。				
	先生からのコメント・振り返り	プロの方からアドバイスを受けて、観光コンテンツの魅力的な見せ方を学び、観光においても動画制作は情報発信ツールとして有効であることを知った様子。今回の研修が9月17日のフィールドワークや10月に参加予定の被災観光地の創造的復興に向けたレスポンスツーリズムを考える『Go Green プロジェクト in 熊本』の研修に活かされることを願う。				

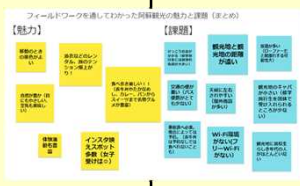
3. 熊本県の取組

②-4 活動報告	日付	9月16日	授業時間	60分×1コマ（60分）	ワークブック 該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			2-3.地域を 知ろう	
	授業内容	事務局からの紹介を受けて阿蘇市へ講師依頼を行い、阿蘇市経済部観光課長をゲストティーチャーとして迎えることができた。授業はオンラインで「阿蘇の観光の現状と課題」というテーマで講話と質疑応答を行った。 【授業の流れ】 ①阿蘇の観光客数の推移、世代別の観光客数、旅行の形態 ②阿蘇観光の顧客満足度、リピート率、九州の県別観光地ランキング ③人気の観光コンテンツ、唯一無二の自然資源 ④インバウンドの効果 ⑤震災における影響 ⑥阿蘇、南小国（黒川）、南阿蘇、高森、西原等、それぞれの特色 ⑦阿蘇地域の交通事情、観光地への移動手段 ⑧阿蘇地域のおすすめグルメ				
	先生からの コメント・ 振り返り	講師から阿蘇の現状を教えていただき、ネットの情報からでは得ることのできない実情も知ることができた。高校生の取り組みにエールを送っていただき、生徒のモチベーションが上がった様子。最初は進んで質問することができなかった生徒も教員側が次々に質問する姿を見て、質問方法がわかったようで最後には生徒からたくさんの質問が出た。				

②-5 活動報告	日付	9月17日	授業時間	10時間30分×1コマ （10時間30分）	ワークブック 該当項目	授業の様子
	使用教材	なし　※フィールドワーク			2-3.地域を 知ろう	-
	授業内容	レスポンスツーリズムの実現と密接にかかわりのある「SDGs」の考え方を、活動の中で実践している施設を中心に、生徒と教員が意見を交わしながら行程を組んだ。具体的には、阿蘇大観峰、阿蘇火山博物館、自主研修（①竹原牧場②阿蘇神社・門前町通り③黒川温泉）、道の駅阿蘇に足を運んだ。				
	先生からの コメント・ 振り返り	台風が最接近する前日だったため天候に恵まれなかったが、自然を観光資源にするということは天候に左右されやすいということや、阿蘇の自然の雄大さを五感で感じる機会になった。また、現地に足を運んだことで、観光客の中に高校生世代の若者が少ないことや、移動手段がマイカーに限られること、高校生にとっても魅力的な観光地・観光資源がいっぱいあること、非日常で得られる満足度は高いことなど、学びが多かった。				

②-6 活動報告	日付	9月30日	授業時間	10分×1コマ（10分）	ワークブック 該当項目	授業様子
	使用教材	YouTubeにアップされた観光動画コンテンツ			-	-
	授業内容	10月のスケジュールを確認し、次回授業の説明と課題を出した。 ・阿蘇市観光課からの情報提供資料を配付 【次回授業内容】 ・Googleドライブにフィールドワークの写真、動画素材をアップし、共有化 ・YouTubeにアップされている観光動画を視聴 ・高校生が阿蘇へ旅行に行きたいと思うようになるために必要な素材とは何か（旅行のライブ感、・楽しさ、阿蘇の自然、非日常の体験等）考える 【課題】 ・9月17日のフィールドワークの振り返りをJamboard（Google内のホワイトボード）に貼る ・観光の情報発信ツールとして9月9日に学んだことを活かした30秒以内のPR観光動画作成				
	先生からの コメント・ 振り返り	中間考査最終日のため、連絡事項のみの活動となったが、フィールドワークで知ることのできた観光コンテンツを含む観光PR動画づくりの課題を出したため、その方向性を確認するための意見交換を実施した。				

3. 熊本県の取組

②-7 活動報告	日付	10月7日	授業時間	15分×1コマ（15分）	ワークブック 該当項目	授業の様子
	使用教材	阿蘇フィールドワークの振り返り（Jamboard）			2-4.考えを 整理する	
	授業内容	9月17日に阿蘇で行ったフィールドワークの振り返りを行い、阿蘇観光の魅力と課題を整理した。 【魅力】 ・移動のときの景色がよい ・食べ歩きが楽しい（赤牛丼や高菜めし、パンやスイーツまで名物グルメが豊富） ・インスタ映えスポット多数 【課題】 ・結構お金がかかる（修学旅行生には経済的負担が大きい） ・坂道が多い（ローファーだと靴擦れする可能性が高い） ・観光地のキャパが小さい（団体で受け入れられるところが少ない）				
	先生からの コメント・ 振り返り	文化祭の当日だったためあまり活動時間が確保できず、フィールドワークの振り返りのまとめを簡単に行った。フィールドワークを通して得た気づきや学びを共有でき、現地で五感を使ってしっかりと学んできたことが伺える内容だった。これらを念頭に置きながら、PR動画や観光コンテンツの制作に活かしてほしい。				

②-8 活動報告	日付	10月14日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目	授業の様子
	使用教材	自主制作した阿蘇観光PR動画			2-5.観光 コンテンツを 考えよう	-
	授業内容	「阿蘇でのフィールドワークで集めた素材をもとに、観光PR動画を30秒以内で制作する」という課題について、動画視聴会と相互評価を行う。 【PR動画づくりを通して生徒達が感じたこと】 ・「30秒」という尺が短い。短い尺の中で阿蘇の魅力収めることに苦労した。 ・阿蘇の魅力が高校生に伝わる内容にするにはどうしたら良いか迷った。 ・「楽しい」を動画で伝えることに苦戦した。				
	先生からの コメント・ 振り返り	動画づくりに慣れていない生徒も多数おり、クオリティーは決して高いとはいえなかったが、全員が自身のアイデアをもとに動画制作を経験することで、どのような表現を取り入れれば短い尺の中で観光地や旅の魅力が伝わるのかということを、具体的な作品づくりを通して学びとる機会になった。次回までに、より良い観光PR動画を制作するためにどのような動画素材が追加で必要かアイデアを出すように指示した。				

②-9 活動報告	日付	10月21日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック 該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			2-5.観光コンテンツを考えよう	-
	授業内容	事務局より参加の打診をいただき、10月29日の『Go Green プロジェクト in 熊本』に参加することとした。また、10月30日の阿蘇でのフィールドワークに向け、これまでの学びを整理するとともに、どのような内容の動画素材を集めるか、場面ごとにアイデアをまとめる。また、以前も講師としてお越しいただいた卒業生の映像クリエイターをお呼びし、ドローンの操作方法と撮影の仕方について学ぶ。また、時間のフィールドワークに向けてSDG s の取組を体感できる旅程を検討した。				
	先生からの コメント・ 振り返り	すでに参考になる動画を見つけ、制作イメージを膨らませてきた生徒もいて、阿蘇の情報発信に対する意欲を感じた。また、フィールドワークではドローンを使った撮影を計画しているため、その操作方法を体験的に学び、生徒もワクワク感が高まったようだった。旅程の計画においても、以前フィールドワークをしたことで得た阿蘇の知識を活かして、所要時間等も考慮して計画を組むことができるようになっていた。				

3. 熊本県の取組

②-10 活動報告	日付	10月28日	授業時間	70分×1コマ（70分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	自主制作した阿蘇観光PR動画			2-5.観光コンテンツを考えよう	
	授業内容	10月29日の『Go Green プロジェクト in 熊本』、10月30日の阿蘇でのフィールドワークに向けた準備として、撮影のポイントを具体的に学ぶ研修を行った。 以前同様、本校の卒業生であるプロの映像クリエイターにゲストティーチャーとして登壇いただいた。 【授業の流れ】 ①各々が制作した動画をプロの映像クリエイターに鑑賞していただき、動画の良かった点、改善点を具体的に教えていただいた。 ②質疑応答では、フィールドワークで予定している撮影シーンについて生徒や教員からの質問を行い、撮影ポイントのヒントをたくさんいただいた。 ・飲食シーンは主観映像の方が美味しさや満足度を視聴者から引き出しやすい。 ・動画はつかみが大事。何だろうと思わせる始まりは視聴者を動画の世界に引き込む。 ・各々につくった動画を組み合わせるのはあまり良くない。特に動画のテイストが違う場合、まとまらない。				
	先生からのコメント・振り返り	各々がつくった動画を講師に鑑賞していただき、プロから直接褒められる経験をして生徒たちも喜んでいるように見えた。 映像を場面場面で止めながら、「ここがよい」、「こうすればもっとよくなる」など、具体的に助言していただいたことで撮影のテクニックに関する学びが深かったようだ。講師から指導を受けるのが2回目ということもあり、大幅に時間が超過するほど生徒側から多くの質問が出された。 効果的なPR手法を学ぶとともに、旅行者ターゲット（高校生の教育旅行）に合わせた観光コンテンツを選定し、撮影の準備は整った。ここで学んだことが10月30日(日)の撮影に活かされることを期待したい。				

②-11 活動報告	日付	10月29日	授業時間	1日	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			2-3.地域を知ろう	-
	授業内容	阿蘇での1回目のフィールドワークを通して、草木などの自然を荒らさないなど、「目に見える」責任の取り方をすることは想像しやすいが、阿蘇をここまで有名な観光地になるよう設備を整え、PRを続けてきた方々の「目に見えない」思いも大切にするという責任感を持ち、阿蘇の皆さんのニーズにも寄り添った観光事業を展開していくことが重要であるということを学んだ。これらの考えを『Go Green プロジェクト in 熊本』で発表した。				
	先生からのコメント・振り返り	非常に緊張した面持ちであったが、自らがフィールドワークを通して感じたことを整理して伝えられており、今までの授業での学びの成果が見える発表であった。				

②-12 活動報告	日付	10月30日	授業時間	1日	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし　※フィールドワーク			2-3.地域を知ろう	-
	授業内容	阿蘇でのフィールドワークを実施。行程は事務局を含め、教員と生徒で話し合い、「SDGs×教育旅行」のプランとして打ち出すことを目指して決定した。 ・皿山トレッキング：ごみを減らす「リデュース」の精神を得る ・赤牛丼：地産地消について学ぶ ・アドベンチャーサイクル（古坊中）：e-BIKE（電動アシスト付きマウンテンバイク）に乗って環境に配慮したコンテンツを体験する ・乗馬体験：阿蘇のスケール感あふれるロケーションで自然を体感する ・草千里散策：阿蘇の人をガイドに火山との共存について学ぶ この他、EV自動車を活用したサステナブルな観光に関する講話や、水をきれいにする阿蘇黄土の講話を受けた。				
	先生からのコメント・振り返り	赤牛丼の収益の一部が草原の維持に充てられていることを知り、自然保護と観光を組み合わせた取組について学ぶことができた。それにより、SDGsの考え方にも触れることにもつながった。また、事前に意見交換を行ったドローンを活用した撮影では、編集時の魅せ方を考慮して、観光PR素材を集めることができていたので、事前学習が活かされていると感じた。				

3. 熊本県の取組

②-13 活動報告	日付	11月3日	授業時間	180分×1コマ（180分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			3.セグメントを考える	–
	授業内容	事務局よりお声がけをいただき、これまでの学びを発表するための機会として、持続可能性を議論しネットワークを広げる場である『第7回サステナブル・ブランド国際会議2023（予選）』に参加することを決めた。これまでの授業を振り返りながら、阿蘇観光の魅力と弱みを整理しつつ、高校生に阿蘇観光をしてもらうためにどのような提案をすればよいかを整理し、論文形式にまとめた。 ・高校生をターゲットにするメリット：発信力が高いため、世界に魅力を発信できる。 ・阿蘇観光の最大の課題：移動手段がない ⇒電動キックボード、観光タクシーの活用で自主研修を行う。				
	先生からのコメント・振り返り	電動キックボードでの移動は『Go Green プロジェクト in 熊本』でMaaSの話を聞いたことから着想を得たようである。高校生が情報発信に用いることの多いSNSで、体験で得た学びや感情を共有することにより、SNSで情報収集することが増えた観光客側も手軽に情報を得ることができる。生徒たちはこのSNSの活用によって、観光地側が若い世代を呼び込むことができる仕組みのひとつとなるのではないかと考えたようである。こうしたことを考えていく中で、若い人ほどこれまでの常識に捉われない新しい価値を創造できる可能性が高いことに着目し、若い観光客を阿蘇にとり込むことこそ、持続可能なツーリズムをつくり出すことに必要だと気づいた様子であった。				

②-14 活動報告	日付	11月25日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	自主制作した阿蘇観光PR動画			2-5.観光コンテンツを考えよう	
	授業内容	【阿蘇観光PR動画の２回目の視聴会】 フィールドワーク時に撮影した素材を基に、各々阿蘇観光PR動画(1分以内)を課題として制作した。 制作した動画を卒業生であるプロの映像クリエイターに事前に鑑賞していただき、授業内で良かった点や改善点などの指導を受けた。			 	
	先生からのコメント・振り返り	これまでより、映像作品のクオリティーが格段に上がっており、生徒が考える阿蘇の魅力的なコンテンツが大々的に打ち出されていて、他県の高校生にも阿蘇の魅力が伝わりやすい構成になっていると感じた。今回の指導・助言を受けて、最終の作品を週末に制作し提出することにしており、教育旅行誘致に役立つ完成版ができることを楽しみにしている。 検定試験、期末考査、修学旅行準備、販売実習準備と生徒達が多忙を極め、11月は実質的な活動ができなかった。時間の確保という点で、通常授業ではないプロジェクト型の難しさを感じた。多忙の中でも締め切りを守り、作品を作ってくれた生徒の頑張りを評価したい。				

②-15 活動報告	日付	11月28日	授業時間	120分×1コマ（120分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			5.収益性・持続性の精査	-
	授業内容	『第7回サステナブル・ブランド国際会議2023（予選）』の論文提出に向けた準備 論文では字数制限のため表現しきれない部分をプレゼン資料とPR動画で補う予定なので、そのためのプレゼン制作も行った。				
	先生からのコメント・振り返り	12月1日から修学旅行に出発するため、11月中に資料をつくりあげる必要があり、間に合うか不安だったが、生徒がよく頑張ってくれた。プレゼン資料づくりを通して、観光プランにおける収益性など、商品化する際の課題等も具体的に考え、実現性の有無を整理できた様子であった。				

3. 熊本県の取組

②-16 活動報告	日付	1月13日	授業時間	55分×1コマ（55分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			2-5.観光コンテンツを考えよう 6.プレゼンする	-
	授業内容	これまで作成してきた論文や提案書を再考する機会とするため、生徒には独自に誘客のための観光プランを提案してもらうこととした。5本の提案が出され、生徒同士による意見交換会を行った。 ①後継者不足に課題意識を持ち、農業体験や酪農体験を中心としたツアー、②宝探しの要素を取り入れた謎解きツアー、③阿蘇の人々の触れ合いを盛り込んだ深阿蘇ツアー、④地元の高校生を運営に活用した阿蘇ロックフェス、⑤若者のコミュニケーションを意識したツアー等、独創的なアイデアも多く見られる内容であった。				
	先生からのコメント・振り返り	冬休み中の課題であった「高校生をターゲットにした新しい観光プラン」の提案会だったが、多くの情報を収集し、データをもとに提案を述べる生徒もいて、活動当初の提案会に比べ、説得力の高いものが多かった。それぞれの提案の中に、阿蘇の魅力をどのような方法で感じてもらうかという視点や若い世代が抱える課題と結び付けようという試みもあり、これまでの学びをもとにプランに活かそうという姿勢も感じられる内容だった。また、質問や意見も積極的に出され、その結果、提案の輪郭や意図がはっきりとし、提案者にとっても何が伝わり、何が伝わってないのかがわかる良い機会になった。今回の提案会を受け、各自が提案内容をブラッシュアップする予定である。				

②-17 活動報告	日付	1月21日	授業時間	90分×1コマ（90分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			6.プレゼンする	
	授業内容	熊本市教育委員会が主催し、豊かな人生とよりよい社会を創造するために自ら考え主体的に行動できる人を育むことを目的としたKumamoto Education Week 2022-23の取り組みの一環として催された「どぎゃん！高校改革～高等学校の今と未来～」に参加した。これまでの取り組みで得た新たな教育旅行の提案内容を発表し、その後、登壇者から助言をいただいた。				
	先生からのコメント・振り返り	登壇者の先生から、観光PR動画から旅を楽しんでいる様子が伝わってきて、共感を生むとてもいい作品だとほめていただいた。また、「教育旅行の難しさは、旅行を決める人（教員）と旅行を楽しむ人（生徒）が違うことである」と指摘をいただき、ターゲットを高校生にするとしても教育旅行に限定せず、阿蘇に自ら足を運びたくなる高校生を見つけ、そこに訴える提案が面白いものになっていくのではないかという助言をいただいた。観光PR動画を別の地域の高校生たちに見てもらい、行ってみたいと思うか、阿蘇の魅力が伝わるか、確かめられる機会があるといいと思った。				

②-18 活動報告	日付	1月25日	授業時間	30分×1コマ（30分）	ワークブック該当項目	授業の様子
	使用教材	なし			5.収益性・持続性の精査	
	授業内容	事務局による紹介を受けて、生徒の考える新たな教育旅行のあり方を提言するため、オンラインで熊本県観光戦略部と意見交換を行った。これまでの取組を通じて生徒たちが既にある教育旅行に対して気づいた課題と改善策について発表を行い、意見・感想をいただいた。また、交通事情も含めて教育旅行を受け入れるキャパシティーの問題について課題を共有した。観光をよりよいものにするために、①阿蘇の魅力を伝える、②交通手段を整えるとともに観光スポット(受け皿)をつくる、③プラスαの消費アップ（お金を落とす仕組み）をつくりビジネスにつなげる必要性を教わった。また、『車がなくてもお得に阿蘇あそBe MaaSまーす』の実証実験についても結果を報告いただき、県内の高齢者の利用が多かったことなど新たな情報をいただいた。さらに、「ヒト」と「オカネ」の問題をクリアしていくことが持続可能な観光を目指す上で重要であることを示唆していただいた。				
	先生からのコメント・振り返り	当日は大雪のため、登校している生徒も少なく、実施できるかどうか心配だったが、貴重な機会を無駄にせず無事実施できたのでよかった。交通手段や観光地のキャパシティーの問題など、こちらが注視する課題がまさに県の観光課と一致していることを共有できたことは収穫であった。全員が揃っていなかったことが原因かと思われるが、積極的に質問する生徒の姿がなく、人材育成を目的とした探究活動であるということを意識し、自分の考えを示したり、疑問に思ったことを相手から引き出したりする力がつくよう、教員側の指導方法を見直す機会にもなった。				

3. 熊本県の取組

	日付	2月1日	授業時間	50分×1コマ（50分）	ワークブック該当項目	授業の様子
②-19 活動報告	使用教材	なし			2-5.観光コンテンツを考えよう	-
	授業内容	「『地元の人たちの想い』をもっとダイレクトに、リアルに伝えるために、教育旅行誘致に向けたモデルコースの提案をどうブラッシュアップしたらよいか」というテーマで議論した。 まずは、「地元の人たちの想い」をみんなで意見を出し合い、共有する中で、10月30日に実施したフィールドワークの皿山トレッキングでお世話になったWakuWaku Office あそBe隊（アクティビティを通して熊本県・阿蘇の大自然の魅力を伝えるプロガイド集団）の隊長に意見をいただいた。特に、「若い人たち（プレーヤー）が観光でご飯が食べられる、そんな地域にしたい。そのために今奮闘している。」という言葉が生徒たちにとって特に印象に残っていたことがわかった。阿蘇を愛する地元の人たちの気持ちは、自分たちが普段、地元に描く思いと温度差があると感じたようだった。 また、株式会社くまもとDMCからも「『火山灰で大変ですね。』と声をかけた観光客に対し、地元の方から『阿蘇の恵みのおかげで私たちは生活できている』という言葉が返ってきた。」という話を受け、阿蘇の魅力は地元の方々と観光客では感じ方が異なることを知った。そしてそれを伝えることで観光客にもより自然を守って観光することの大切さに気付いてもらう必要があるという考えに至ったが、住民と観光客が同じ認識を持つためのアイデアがなかなか出なかった。この課題の解決のためには観光客と地元の方との交流がカギだという意見が挙がったものの、観光客が地元の方と話をする場面として買い物、食事程度しか思いつかなかったが、機会を増やすためのきっかけづくりとして、地元の観光案内所に地元ガイドを採用し、その方にバスに乗り込んでガイドしてもらうのが良いのではないかという意見にまとまった。				
	先生からのコメント・振り返り	これまで以上に難しいテーマだったようで、生徒もいつものように意見が活発に出る様子ではなかった。途中、農業体験や野焼きツアーなどの意見も出たが、既に存在しており、「正直なところ高校生が参加したがるだろうか」という問いかけには、「現状では難しい」という意見であった。農業体験も野焼きツアーも自らが体験していないため、阿蘇のコアな魅力に迫るものであるとは理解できても、その魅力を観光ツアーに落とし込むことが難しいと感じたようだ。 最終的に地元ガイドを使った観光という意見に収まったが、生徒も納得解を引き出せたというよりは、「何かしっくりこないけれど、今思いつく最も堅実な方法はこれではないか」という様子だったように感じた。しかしながら、夢のような話よりもむしろリアル感を持って具体的な方法を考えていたからこそ、この答えに落ち着いたのではないかとも評価できる。 今回の探究学習において、熊本市と阿蘇市という距離の問題があり、現地の方々との交流ができず、実証実験も計画できなかったため、地元のコアな思いをリアルに触れる機会が少なかったのではないかと感じた。仮定だが、現地でのフィールドワークをもう少し増やしたり、地元の観光関連企業や自治体とひざをつき合わせて一緒に解決策を考える場を用意し、小さな実証実験（プロジェクト）ができていたら、これらの突破口となるアイデアが出たのではないかと思う。				

	日付	2月16日	授業時間	2時間	ワークブック該当項目	授業の様子
②-20 活動報告	使用教材	なし			6.プレゼンする	-
	授業内容	観光庁の主催する成果報告会にて、本校のこれまでの取り組みを発表した				
	先生からのコメント・振り返り	発表者となる生徒2名が、配信会場より成果報告会に参加。取組を通して、生徒たちが本当に変わっていく姿を感じた。普段の授業は受け身がちだが、この授業では映像作品をそれぞれがつくったり、それを批評しあったり、参考にしたり、意見交換したり、ブラッシュアップしたりと様々なことを繰り返したことで、異年齢集団であったが、時間の経過とともに思いを出し合えるチームになっていった。また、教育旅行がテーマだったため自分ゴト化しやすく、自らの教育旅行での経験もこの学習に関連付けることができていたが、実際の教育旅行では教員の意見も強く反映されることから、誰にアプローチすべきか等、学習を進めるたびに新しい課題を見つけ、その答えを探す探究の日々だった。それでも最後まで生徒達が楽しく活動できたのは観光の持つ魅力、地元の魅力、まちづくりの魅力、それを支える人々の魅力に触れたからではないかと思う。指導に当たった教員一同も常にわくわくしながら授業を進めることができた。				

3. 熊本県の取組

本事業を通して、学校の所在地とは異なる人吉市・球磨村や阿蘇市の観光振興に取り組み、実際に現地でフィールドワークを行った。地域住民や現地の観光事業者と交流することで、フィールドワーク先の地域の魅力に気づき、熊本県全体に対する愛着や誇りの醸成に繋がった。また、他県からの教育旅行誘致に向けて、フィールドワーク時の行程をブラッシュアップし、熊本市を基点としたモデルコースを作成するとともに、その魅力を他地域へ発信する動画の制作を行った。このように、モデルコースやPR動画、論文等の制作に取り組んだことで、生徒自身の学びを可視化することができ、地域にも還元されうる取組となった。

授業の取組の中で実際に制作した動画とモデルコース、提案書は下記の通り。

（1） 動画

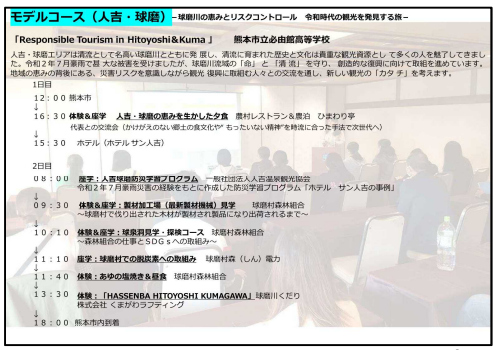
教育旅行誘致の素材として役立てるため、各学校のフィールドワーク先を舞台とし、観光PR動画を制作した。制作の中でターゲット層の検討や観光素材の魅力的な発信方法についても理解を深めた。

▲球磨・人吉　～旅する高校生～（必由館高校）

▲阿蘇　～旅する高校生～（千原台高校）

（2）モデルコースの作成

フィールドワーク前にコースを作成し、実施後にはアクセス方法や所要時間等を見直し、熊本市を起点とした、人吉・球磨コースと阿蘇コースのモデルコースを作成した。作成されたコースは自治体や観光協会等において、今後教育旅行を誘致するための、参考資料として地域で活用される。

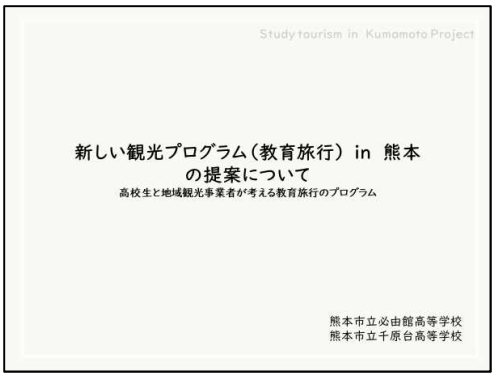


▲Responsible Tourism in Hitoyoshi＆Kuma（必由館高校）

▲Responsible Tourism in Aso（千原台高校）

（3）新しい観光プログラム（教育旅行）提案書の作成

フィールドワークを通じて気づいた観光地の魅力や課題について必由館高校と千原台高校の生徒から意見をもらい、各校の教員や地域関係者とともに事務局が意見をまとめた。

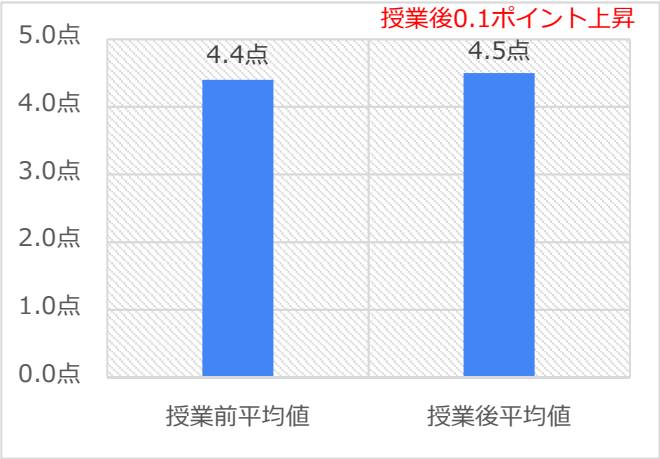


3. 熊本県の取組

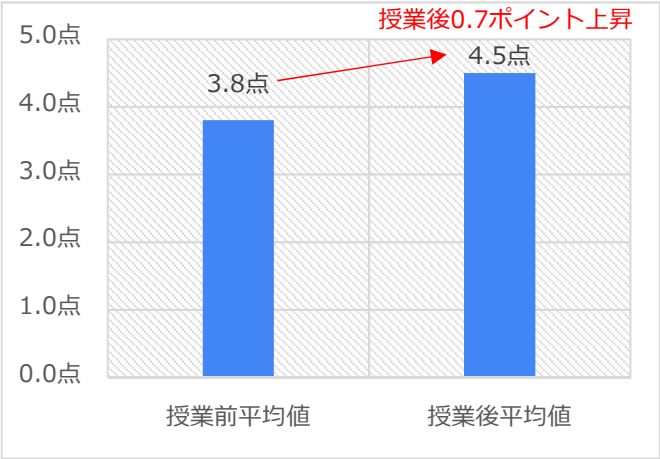
授業前後アンケート結果比較(熊本県・必由館高校1年生)

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

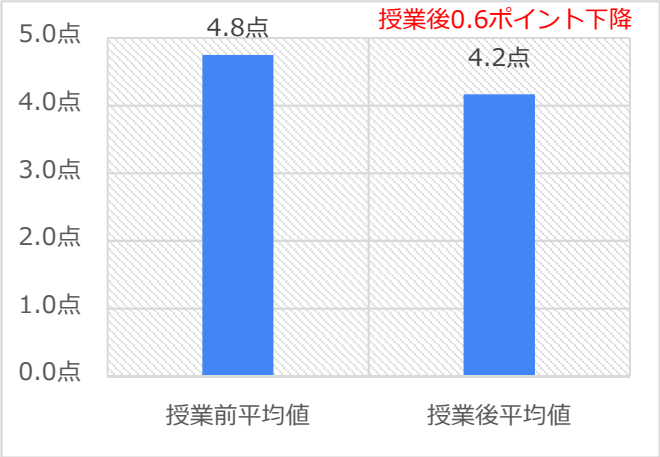
（1）熊本県に「自分のまち」としての愛着を感じている



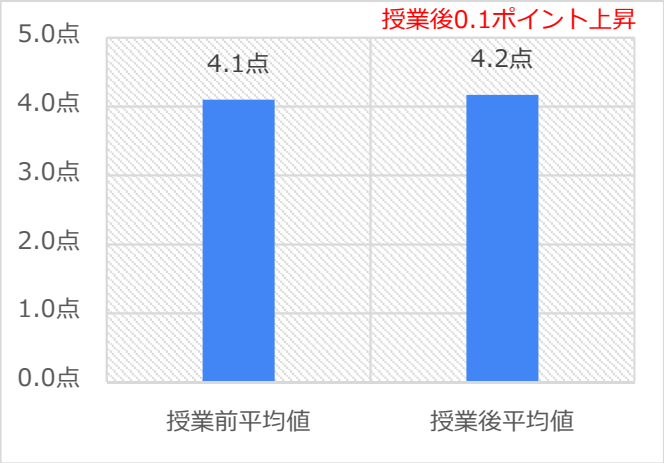
（2）熊本県に住み続けたい／通学し続けたい



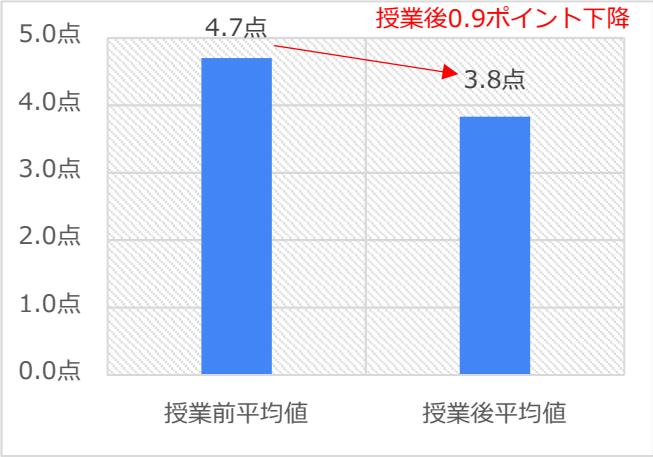
（3）熊本県の観光の魅力について学びたい



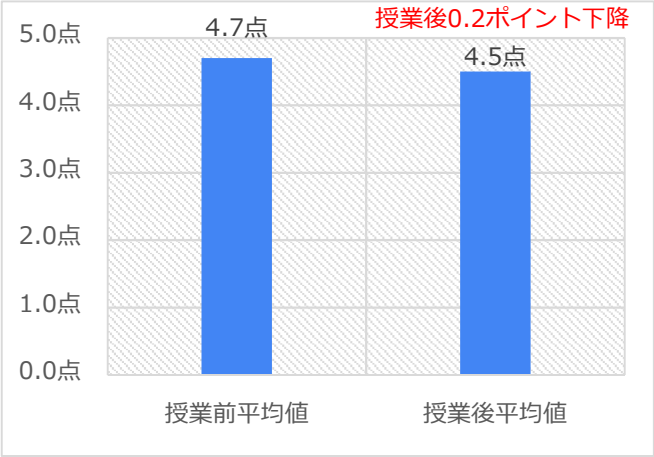
（4）熊本県の魅力を周りの人にも勧めたいと感じている



（5）熊本県に観光の魅力があると思う



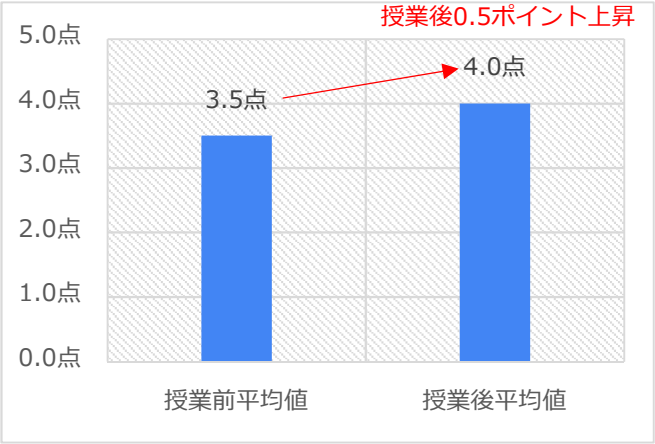
（6）熊本県もっと観光客が訪れてほしいと感じている



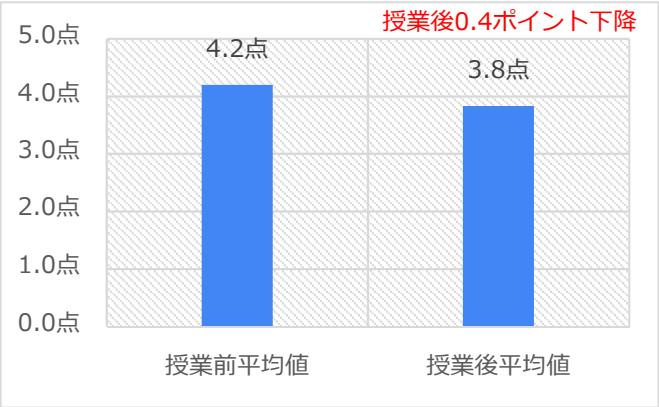
3. 熊本県の取組

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

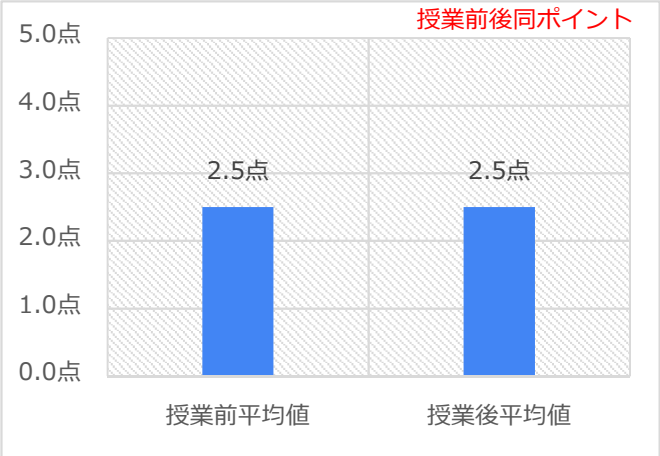
（7） 地域の観光産業について理解を深めたい



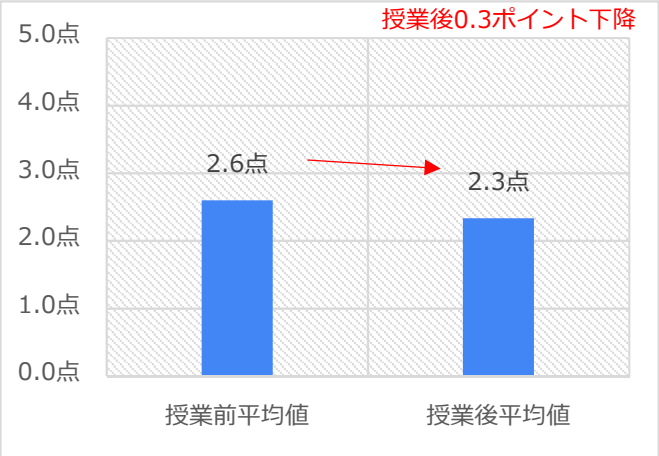
（8）地域の観光資源を活用する取り組みやイベントに参加したい



（9）高校を卒業した後、観光に関する大学・短大・専門学校等でさらに観光を学びたい



（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。



考察

必由館高校の生徒は授業開始前から地元に対する愛着が深い傾向にあった。特に、地元の観光資源として多くの生徒が「水」を挙げており、生徒自身が豊かな自然の恩恵を受けて生活をしてきたことが伺える。また、取組を通して「（2）熊本県に住み続けたい／通学し続けたい」はさらに0.7ポイント上昇している。同じ県内でも、自分たちが生活拠点とする地域以外の地域について学んだことで、熊本県全体の魅力に気づき、さらに愛着が深まったのではないかと推察される。

しかしながら、「（5）熊本県に観光の魅力があると思う」は、0.9ポイント下降しており、また、地元の魅力を知っているにも関わらず、「（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。」は0.3ポイント下降している。この理由として、必由館高校がフィールドワークを行った人吉市・球磨村での豪雨災害など、今もなお、災害復興に取り組む熊本県で生活する生徒にとって、外的要因に左右され不安定な面もある観光業を自身の仕事にすることへの課題を感じていると考えられる。事業を通して、地域課題を今まで以上に自分ゴトとして考えられるようになったことの裏返しともとれる。

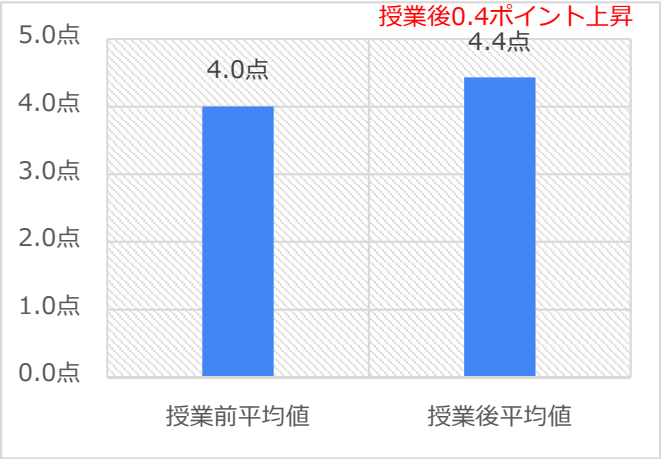
ただ、「（7） 地域の観光産業について理解を深めたい」という思いは向上しているため、今後様々な角度から観光に関わる中で地域課題の解決に取り組むことが期待される。

3. 熊本県の取組

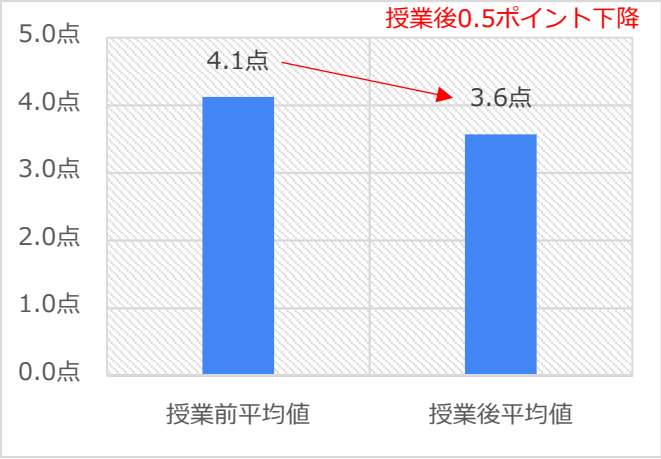
授業前後アンケート結果比較(熊本県・千原台高校1・2年生)

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

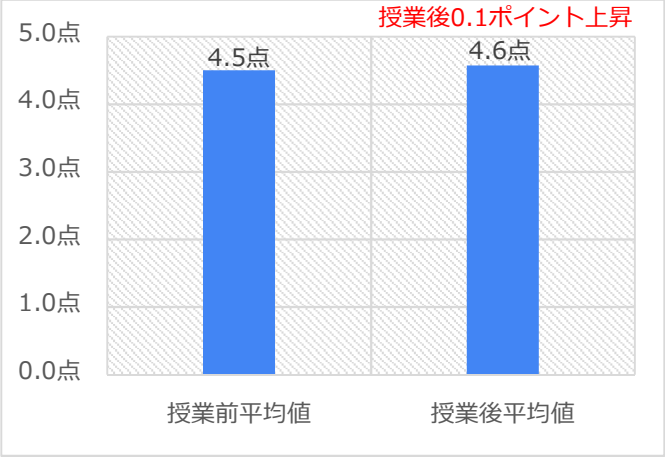
（1）熊本県に「自分のまち」としての愛着を感じている



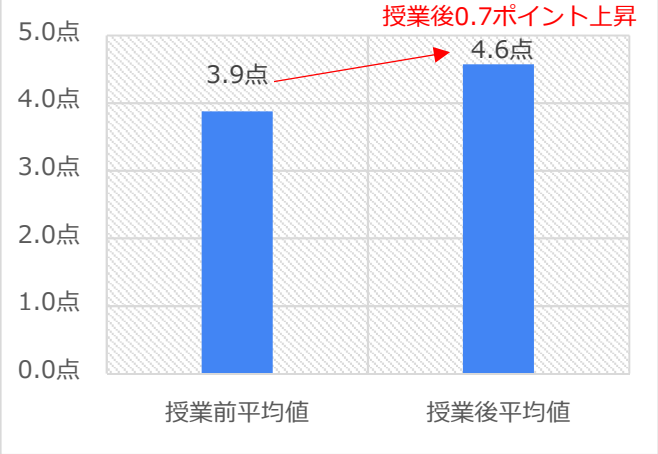
（2）熊本県に住み続けたい／通学し続けたい



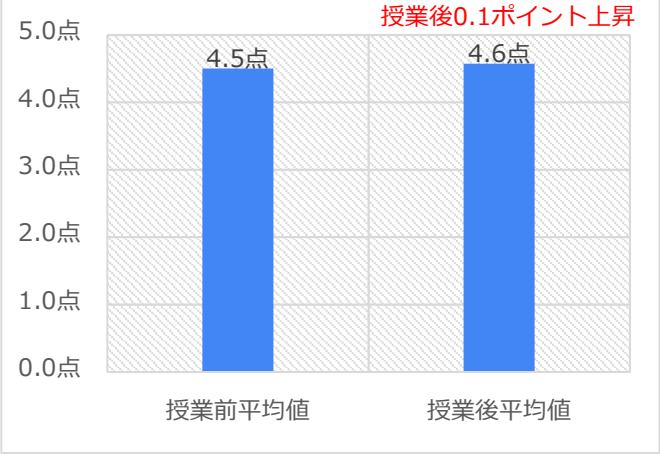
（3）熊本県の観光の魅力について学びたい



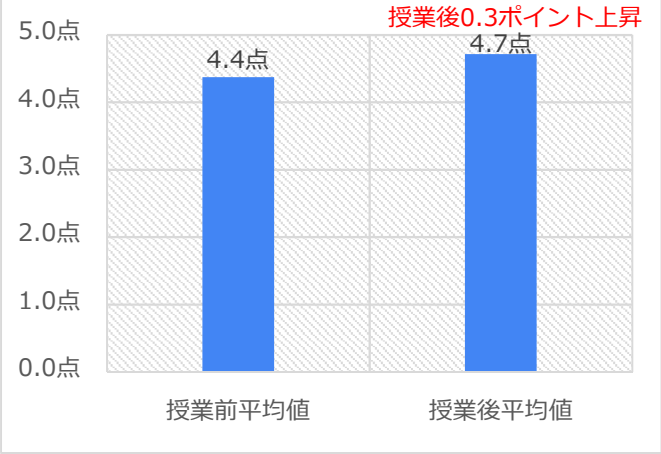
（4）熊本県の魅力を周りの人にも勧めたいと感じている



（5）熊本県に観光の魅力があると思う



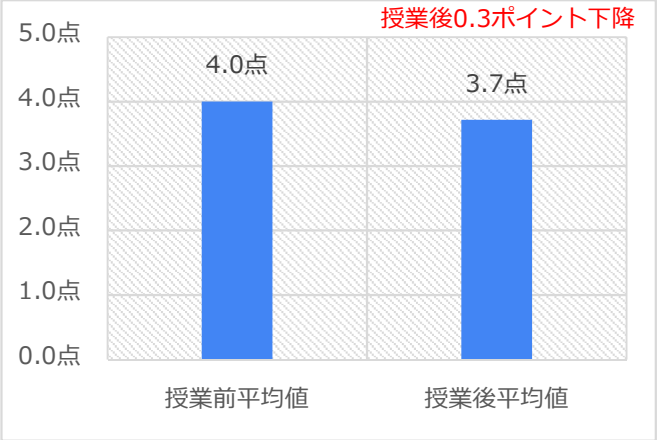
（6）熊本県もっと観光客が訪れてほしいと感じている



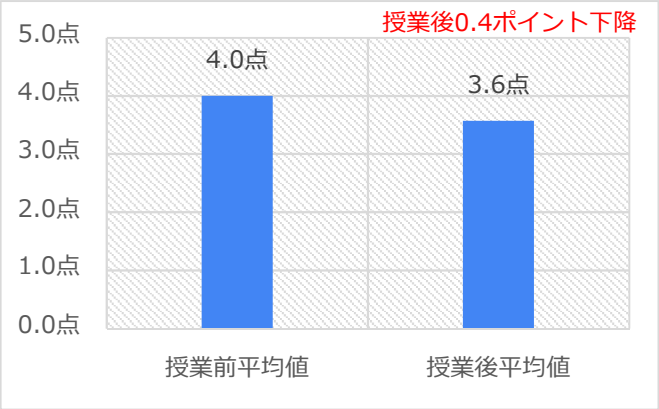
3. 熊本県の取組

問2. 地域や観光に対する、あなたの思い（考え）について

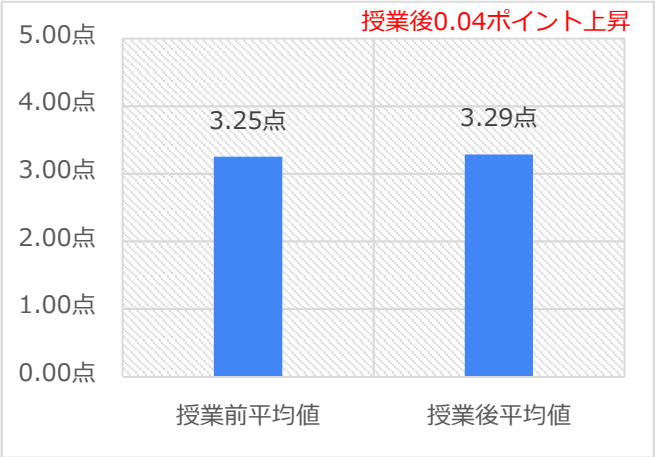
（7） 地域の観光産業について理解を深めたい



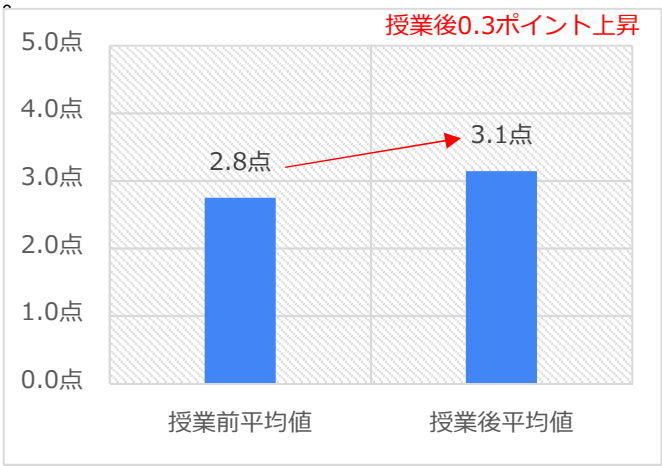
（8）地域の観光資源を活用する取り組みやイベントに参加したい



（9）高校を卒業した後、観光に関する大学・短大・専門学校等でさらに観光を学びたい



（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。



考察

同じ熊本県の必由館高校の生徒と同様に千原台高校の生徒も地域への愛着は当初より深い傾向にあったが、授業を通してさらに深まっている。特に、「（4） 熊本県の魅力を周りの人にも勧めたいと感じている」は授業前後で0.7ポイント上昇している。生徒のコメントの中でも「SNSを活用して情報発信を行いたい」や「多くの観光客を呼ぶことで地域活性化につなげたい」などが挙がっており、フィールドワーク先である阿蘇市で活動する方々の、環境を守りながらも、観光地として地域を盛り上げることで地元に貢献したいという強い想いを受け取り、阿蘇市をはじめとした熊本全体の魅力を実感し、地域活性化に取り組むことへの意欲に繋がったと考えられる。

また、「（10） 将来、観光に関する仕事に関心がある。観光業で働くことも選択肢の一つとして考えている。」点においても、僅かながら上昇しており、旅行者としての視点から地域の観光を支える人材としての視点が育ったと考えられる。ただ、「（2） 熊本県に住み続けたい／通学し続けたい」のポイントが下降していることから、熊本県で観光に携わりたいと思う生徒が多いかは定かではない。一度、進学等で熊本県外に出た場合にも将来は熊本県で活躍したいと思うきっかけとなるように、成長の早期の段階から自地域への愛着と誇りを醸成することが重要と考えられる。

4. アンケート結果（教育･観光関係者向け）

アンケート集計結果

実施日：2023年2月16日（木）～3月3日（金）
実施対象：加賀市内教育・観光関係者4名、熊本県内教育・観光関係者8名
回答数：8件

（1）事業成果

教育関係者及び観光関係者に本事業に参加してみての成果を確認したところ、「観光教育の具体的手法や授業の進め方を学んだ」が最も多かった。観光教育の実践方法を模索していたところ、今回の事業を通して授業を行うためのノウハウを知ることができたと考えられる。また、事業を行う中で「産学連携における有効な手段を知った」、「授業の実施における有効な教材を知った」ことも挙げられており、次年度以降、観光教育を推進する上での土台作りができたと考えられる。（表①）

▼表①　※複数選択

項目	件数
産学連携における有効な手段を知った	4
授業の実施における有効な教材を知った	4
自地域での観光教育関連費の予算化につながった	0
観光教育の具体的手法や授業の進め方を学んだ	6
得るものはなかった	0
その他	2
TOTAL	16

➢ その他
・高校生から新たな観光への気付きをいただいた。
・課題解決に必要なトライ＆エラーを体感できたことや人とのつながり方やその大切さに気付くことで、生徒の積極性や行動力、自信などを得ることができた。

（2）今後の取組方針

次年度以降、地域にて観光教育プログラムの実践・継続・自走化を行うために取り組んでいることとして、「国や地域、大学、高等学校等の連携強化」と「高校生向けの観光関連コンテストなどの発表の場の活用」が多く挙がった。学外の地域・観光関係者とも連携し観光教育を推進することのメリットを本事業を通して享受した結果として、今後も大学等、別機関との連携を進めることの重要性を感じたと推察される。また、「高校生向けの観光関連コンテストなどの発表の場の活用」は、本事業の中で外部に向けた取組発表を複数行ったことで、取組をより実践的にすることや、生徒たちのモチベーション維持・向上に寄与することがわかり、今後も観光教育を行う上で短期的なゴールとして効果的であると実感したと考えられる。（表②）

▼表②　※複数選択

項目	件数
観光教育に専門的な知識を有する方との連携	5
国や地域、大学、高等学校等の研究事業の成果を活用	3
国や地域、大学、高等学校等の連携強化	7
既存の教科書・専門書の活用	0
高校生向けの観光関連コンテストなどの発表の場の活用	7
様々な観光の専門情報を教員自ら入手、活用	1
その他	1
TOTAL	24

➢ その他
・観光まちづくり団体や地域の観光専門学校での講演

Ⅲ　成果報告会の開催

1. 概要

開催概要

開催名：
観光庁「未来の観光人材育成事業」 成果報告会

日時：
2023年2月16日（木）　10:00 ～ 12:00

開催の目的

令和4年度「未来の観光人材育成事業」のモデル地域である、加賀市と熊本県の取組内容の共有・発信を通じて、他地域への波及に繋げ、観光教育の更なる普及・発展を目指す。

配信会場

株式会社日本旅行　日本橋本社
〒103-8266　東京都中央区日本橋1丁目19-1

開催形式

オンライン開催（Zoom）
※一部登壇者のみ配信会場にてリアル参加

参加概要

参加申込人数：　323名
実際の参加人数：269名（参加率83%）
アンケート回答人数：130名（回答率48%）

1. 概要

申込受付

参加申込受付のため、専用ウェブサイトを立ち上げた。

1. 概要

広報

■チラシ

開催内容をまとめたチラシを作成し、参加申込サイトへの掲載と各関係者への配布を行い、応募促進の補足資料として活用した。

1. 概要

広報

■関係各所への広報
開催内容をまとめたチラシを活用し、各関係者への個別連絡を行う等、下記の手段にて広報を実施した。

➢ 事務局

No.	媒体
1	モデル地域である加賀市・熊本県の関係者に直接連絡
2	各実施校のフィールドワークに協力をいただいた観光関連事業者に直接連絡
3	関係者を通じて、有識者や各都道府県の教育委員会・観光協会・学校に連絡
4	全国のユネスコスクールへの告知
5	事務局より第4回ESD Teacher's Camp in SB 東京丸の内で告知

➢ 観光庁

No.	媒体
1	観光庁ホームページ
2	地方運輸局へ直接連絡
4	各地域のDMOに直接連絡
5	観光庁の外郭団体に連絡

2. 実施内容

プログラム

成果報告会のプログラムは下記の通り。

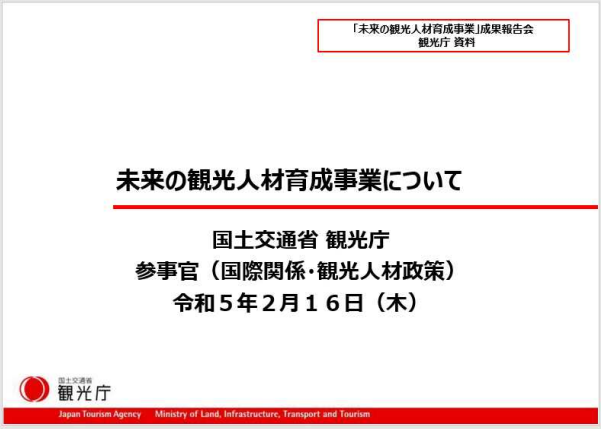
time	lap	scene	cast
10:00 ～ 10:05	5'	**開会挨拶および 事業概要説明**	観光庁　参事官（国際関係・観光人材政策）
10:05 ～ 10:15	10'	**事務局発表** 地域・学校の連携方法等 地域における観光教育実施のポイント	令和4年度「未来の観光人材育成事業」事務局 株式会社日本旅行　事業共創推進本部 兼 SDGs推進チーム マネージャー
10:15 ～ 11:25	70'	**モデル地域発表** モデル地域① 加賀市 モデル地域② 熊本県	事例紹介 ①加賀市 石川県立大聖寺実業高等学校　教員・生徒 加賀市役所　観光交流課　課長 ②熊本県 熊本市教育委員会　学校改革推進課　教育審議員 熊本市立必由館高等学校　教員・生徒 熊本市立千原台高等学校　教員・生徒 株式会社くまもとDMC　代表取締役社長
11:25 ～ 11:59	34'	**パネルディスカッション**	ファシリテーター 日本大学　国際関係学部　教授　宍戸 学 氏 パネリスト ①加賀市 石川県立大聖寺実業高等学校　教員 加賀市役所　観光交流課　課長 ②熊本県 熊本市教育委員会　学校改革推進課　教育審議員 株式会社くまもとDMC　代表取締役社長
11:59 ～ 12:00	1'	**閉会挨拶**	MC

2. 実施内容

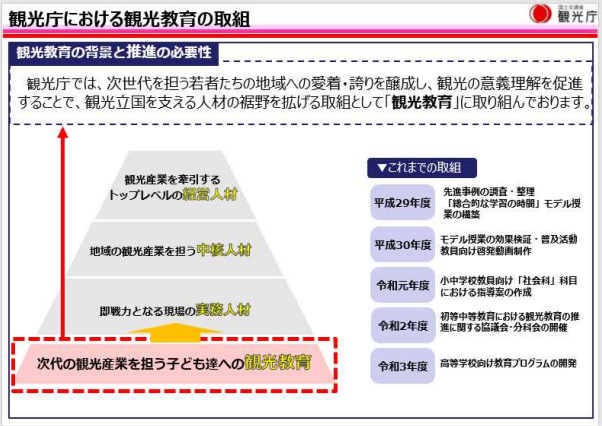
実施内容

■開会挨拶および事業概要説明

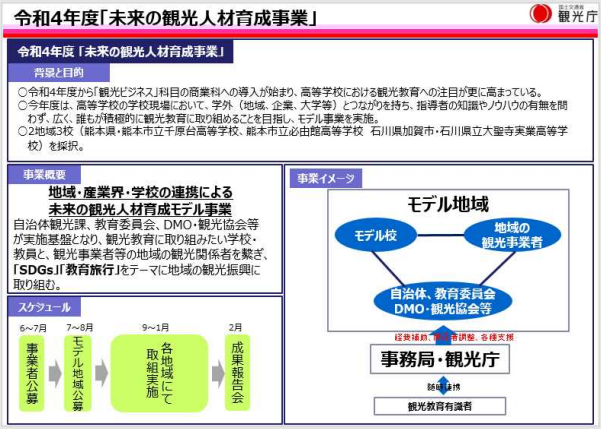
観光庁参事官（国際関係・観光人材政策）が開会挨拶を行い、事業概要を説明した。



1



2



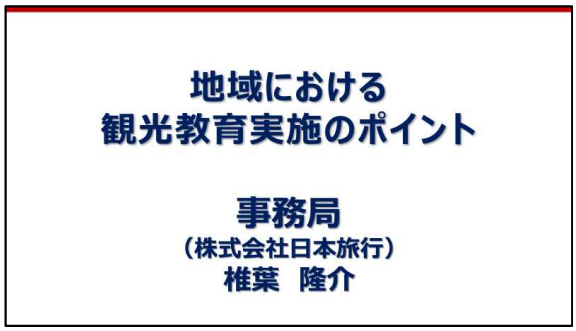
3

2. 実施内容

実施内容

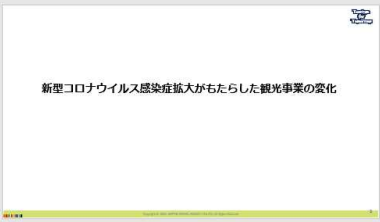
■事務局発表

地域・学校の連携方法等、地域における観光教育実施のポイントをテーマに、事務局発表を行った。



0

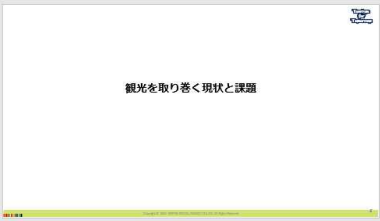
1



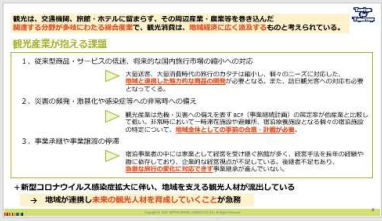
2

3

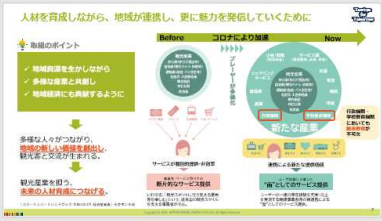
4



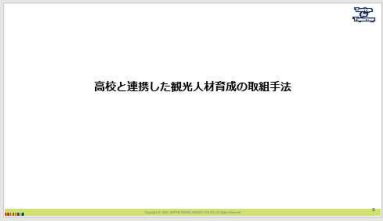
5



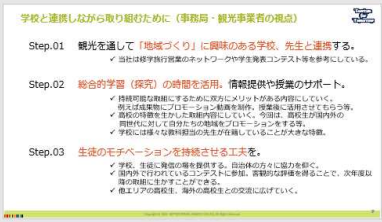
6



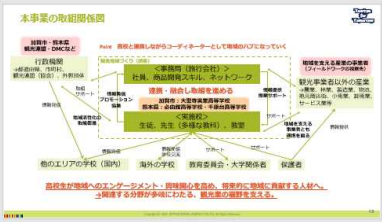
7



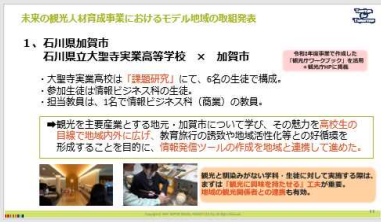
8



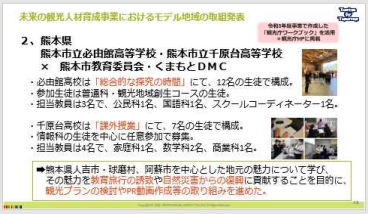
9



10



11



12

2. 実施内容

実施内容

■モデル地域発表①

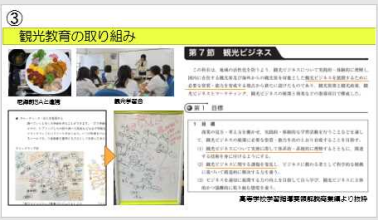
大聖寺実業高校・加賀市から取組を発表した。

モデル地域成果報告①
石川県加賀市

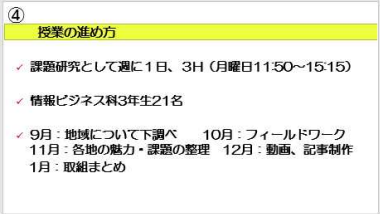
石川県立大聖寺実業高等学校
加賀市（産業振興部観光交流課）

1

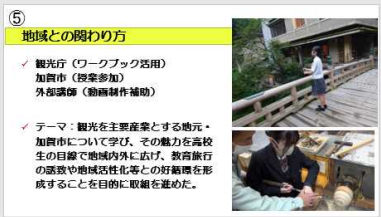
2



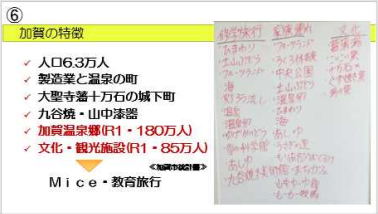
3



4



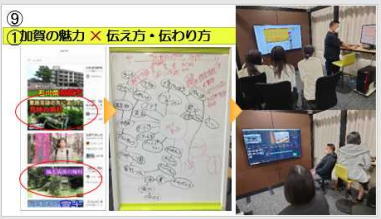
5



6

7

8

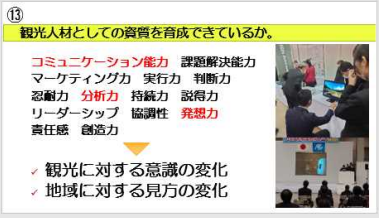


9

10

11

12



13

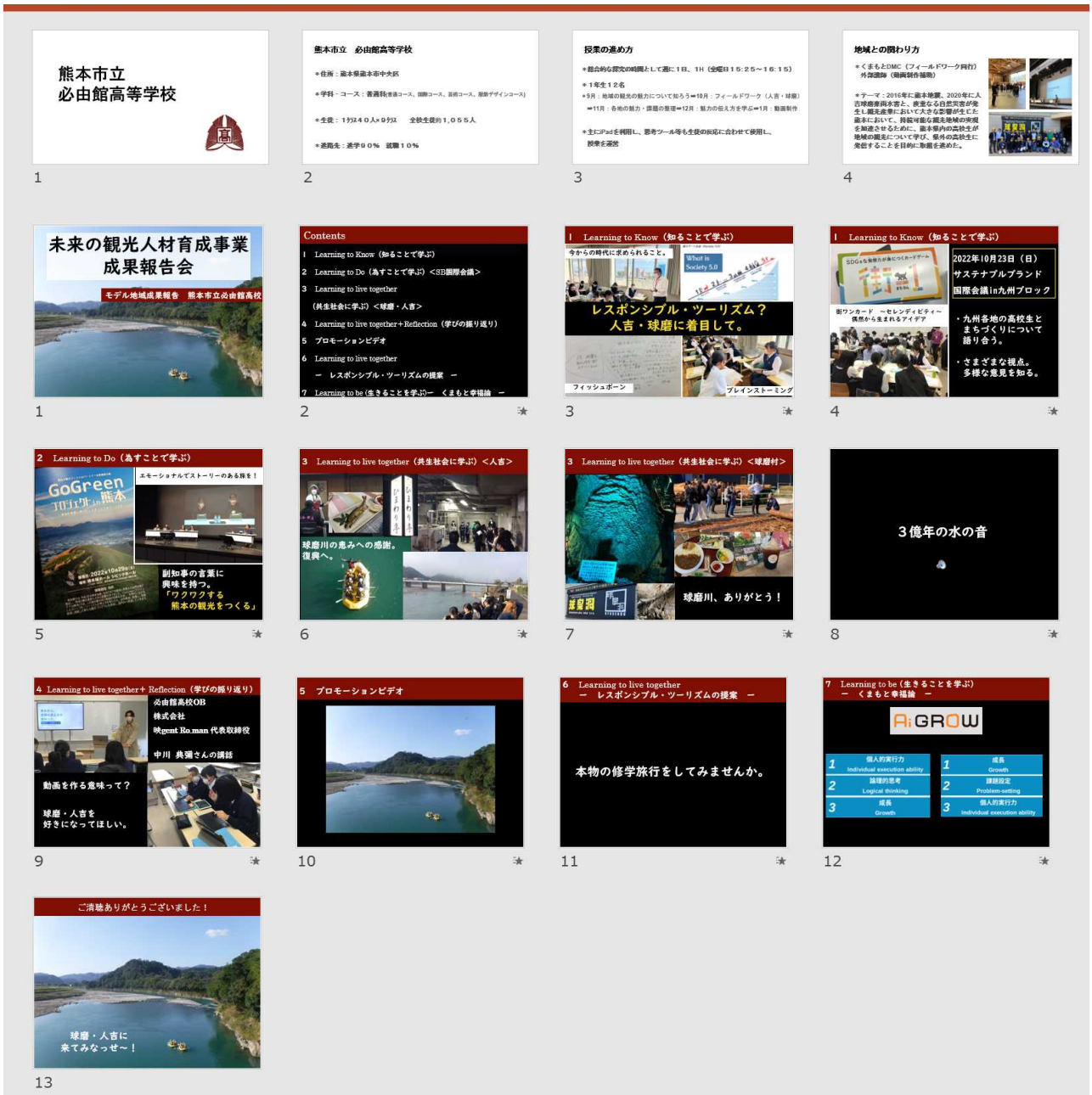
2. 実施内容

実施内容

■モデル地域発表②

熊本市教育委員会、熊本市立必由館高校、熊本市立千原台高校、株式会社くまもとDMCから取組を発表した。

熊本市立必由館高校



2. 実施内容

実施内容

熊本市立千原台高校

2. 実施内容

実施内容

■パネルディスカッション

日本大学宍戸教授がファシリテーターとして進行を行った。また、各モデル地域から、教育関係者・観光関係者がそれぞれ登壇した。加賀市からは石川県立大聖寺実業高等学校教員と加賀市役所観光交流課課長、熊本県からは熊本市教育委員会学校改革推進課教育審議員と株式会社くまもとDMC代表取締役社長がパネリストとして登壇し、下記3つのテーマで意見交換を行った。

テーマ①　産学官連携の手法、体制作り

質問：今回、様々な関係者がこの取組に参画しているが、産学官が連携した実施体制をどのように構築されたか。

回答（教育関係者：石川県立大聖寺実業高等学校教員）

：今までは、お互いの業務がある中で積極的な連携が難しかったが、本事業に参画し事務局が間に入って調整してくれたことで、加賀市から取材先のアポイント調整などをしていただける旨のお声がけをいただくなど、地域との繋がりができた。

回答（教育関係者：熊本市教育委員会学校改革推進課教育審議員）

：教育委員会が中心となり、事務局のサポートを受けながら体制づくりを進めた。教育委員会がプロデューサー、行政の各課や民間事業者がディレクター、子どもたちがプレーヤーと役割を分けたことが事業進行を円滑にしたポイントである。

テーマ②　地域における観光人材育成、観光教育が果たす役割・効果、課題

質問：　各地域での観光人材育成、また、そこに観光教育が果たす役割について、どのように考えるか。
また、取組を通して感じた効果や課題についての意見を伺いたい。

回答（観光関係者：加賀市役所観光交流課課長）

：取組を通して、シビックプライドの醸成に効果があったと感じている。地域の活性化にも繋がり、観光都市としての持続可能性も模索できたと考えている。

回答（教育関係者：石川県立大聖寺実業高等学校教員）

：生徒のマインドが取組を通して変化したと感じた。地域を支える産業として観光が果たす役割に気付いたり、理解が進んだと感じた。

回答（教育関係者：熊本市教育委員会学校改革推進課教育審議員）

：「観光」を教育の要素として取り入れることで、一歩踏み込んだ主体的な学びを得られる。特に、フィールドワークを通してその土地の文化や人と触れ合うことで心が動く、感性が行き来することを体感できた。こうした体験を得られるのがまさに新しい教育旅行であると考える。

回答（観光関係者：株式会社くまもとDMC代表取締役社長）

：日頃の取組の中で、大学生のインターンシップを受け入れたり、一般の市民の方へ観光の考え方を理解してもらうために、観光地域づくりに関する講演を行っている。地域全体で観光への理解を深めていくことは、新しい人材確保と観光を盛り上げる上で重要だと考えている。

2. 実施内容

実施内容

テーマ③　地域住民の巻き込み

質問：　今後、更に拡大する観光需要に対応するためには、高校生をはじめとした若い世代の巻き込みは勿論のこと、住民全体を含めて地域が一体となり観光教育に取り組むことが必要と考える。
地域が一体となった観光教育の普及・発展、それによる観光人材育成、地域活性化のために、各ステークホルダーに求められる役割や必要な取組、自地域での今後の展望に関してどう考えるか。

回答（観光関係者：加賀市役所観光交流課課長）
：成功事例を積み上げて、成果を見える化し、一般の方にも共有することが重要であると考えている。産学官が連携し、観光人材を育成し、地域の活性化に繋げていくサイクルを作るためにも、小さなことから取組を広げていきたいと考えている。

回答（教育関係者：石川県立大聖寺実業高等学校教員）
：学校の外での活動をサポートいただけるような主体が近くにいると、教育現場でも、フィールドワーク等の様々な体験ができると感じている。教育機関だけでなく、地域と連携する仕組みがあると取組は加速化すると考える。

回答（教育関係者：熊本市教育委員会学校改革推進課教育審議員）
：「コト」によって人を巻き込むことが観光教育や観光地域づくりを行ううえで重要となる。地域が一体となって「コト」を創出し、そこに人を巻き込む。例えば、大学生によるまちづくりの取組など。一般住民の巻き込みにおいても、同じことが言えるのではないか。

宍戸教授の総括：

・石川県立大聖寺実業高校は、情報ビジネス科の授業の枠で、観光ビジネスの導入を見据えて、問題意識を持った先生がしっかりとカリキュラムを組んで、様々な取組が行われたことが評価できる。

・熊本市の事例に関しては、市の教育委員会のコーディネーターのような存在は大変効果的であった。複合的な様々な組織が連携するには、誰がステークホルダーをまとめていくのかが大変重要。教育界、産業界、行政の関係を繋ぐことは難しいが、そのコーディネーター役を教育委員会が担って連携していた良い事例。
探究学習と課外授業での実施であったため、商業科や観光ビジネスといった狭い範囲ではなく、より広く多くの生徒に学んでもらうということが注目に値する。教育改革が進む中で、地域を学ぶ学科が誕生していくと、今回のような学びは先駆的な事例として参考にできると考える。

・3つの観点から今回の取組を総評したいと思う。

①観光教育と人材育成をどうとらえて取組を行うかが重要。観光立国が進む中で、実務人材育成や、地域住民の理解などの基礎教育、修学旅行や教科教育において「観光」を題材として取り扱う学びなど、様々な要素がある中で、何を目的に、どのように観光教育を行っていくのかを議論し合うことが重要。

②観光教育をどのような方法で行うのか考えていくことが重要。商業科を中心に一般的に観光が科目として認識され始め、教育意識が高まっており、観光ビジネス科目においては今後教科書もでき、一つの教育方法が例示されてくるところ、取り扱う教科等によって、どのような教育方法を選択していくのかを模索することが求められている。

③観光教育を実施するために、地域においてプラットフォームをどう作るかが重要で、取組を持続的に行える体制を整えることが極めて重要。教育・行政・地域の産業界が、観光人材や教育をめぐって、観光の効果を上げていくために、または地域の持続のために、どのように観光教育を推し進めていくのか議論していくことが、今後の発展に繋がると考える。

3. 参加者アンケート

参加者アンケート

■成果報告会の参加者に対してアンケートを実施した。

観光庁「未来の観光人材育成事業」成果報告会　アンケート

この度は、観光庁「未来の観光人材育成事業」成果報告会に参加いただき、ありがとうございました。
今後の事業運営の参考にさせていただきますので、下記のアンケートへのご協力をお願いいたします。
※当てはまるものにチェックをつけてください。

misa_kosaka@nta.co.jp（共有なし）アカウントを切り替える

*必須

【個人情報の取扱いについて】
ご登録いただいた個人情報は、観光庁「未来の観光人材育成事業」でのみ利用し、他の用途には利用いたしません。今回の事業の運営を担当する株式会社日本旅行の個人情報の取扱いについては「個人情報の取扱いについて（https://www.nta.co.jp/security.htm）」をご参照ください。個人情報の提供に同意いただける方は下記チェック頂き、アンケートに進んでください。

○ 承諾する

Q1.　今回の成果報告会をどのようにしてお知りになりましたか。（複数回答可）

- □ 1. 観光庁ホームページ
- □ 2. 観光庁Twitter
- □ 3. 観光庁からの案内
- □ 4. 登壇者からの案内
- □ 5. 事務局（日本旅行）からの案内
- □ 6. 所属先や関係者からの案内

Q2.　今回の成果報告会に参加いただいた理由をご回答ください。（複数回答可）

- □ 1. 既に観光教育に取り組んでおり他地域の事例を参考にしたい
- □ 2. これから観光教育に取り組みたい
- □ 3. 観光人材育成の観点から観光教育に関心がある
- □ 4. 教育的意義の観点から観光教育に関心がある
- □ 5. 観光振興の観点から観光教育に関心がある
- □ 6. 観光教育の実践例について知りたい
- □ 7. 「観光ビジネス」科目実施の参考にしたい
- □ 8. 「総合的な探究の時間」の参考にしたい
- □ 9. 課外活動の参考にしたい
- □ 10. 教育旅行誘致の施策に役立てたい
- □ 11. 星学宿連携の手法や取組を知りたい
- □ 12. 関係者が登壇している
- □ その他:

Q3.　特に印象に残ったプログラムを選択してください。（複数回答可）

- □ 1. 観光庁挨拶・事業概要説明
- □ 2. 地域における観光教育実施のポイント（事務局・日本旅行）
- □ 3. モデル地域成果報告①（加賀市）
- □ 4. モデル地域成果報告②（熊本県）
- □ 5. モデル地域によるパネルディスカッション
- □ その他:

Q4.　今回の成果報告会の内容について、ご自身の仕事や活動において参考になりましたか。

- ○ 1. 非常に参考になった
- ○ 2. 参考になった
- ○ 3. どちらともいえない
- ○ 4. 参考にならなかった
- ○ 5. 全く参考にならなかった

Q5.　Q4の回答理由をご記載ください。

回答を入力

Q6.　今回の成果報告会に参加したことで、今後、実際に行動に移そうと考えていることはありますか。（複数回答可）

- □ 1. 自地域（自校、自社）でも観光教育を実施する。
- □ 2. 自地域（自校、自社）での観光教育実施を検討する。（具体的に会議などの場で提案する、投げかける）
- □ 3. 自地域（自校、自社）で既に行っている観光教育の参考にする。
- □ 4. 観光教育の実践例や意義について周りの人に伝える。
- □ 5. 観光教育についてもう少し詳しく調べてみる、知る機会を作る。
- □ 6. モデル地域（加賀市・熊本県）と意見交換を実施する。
- □ 7. 特になし
- □ その他:

Q6で「6. モデル地域（加賀市・熊本県）と意見交換を実施する。」を選択された方は、具体的にどのような内容で意見交換を実施されたいかご回答ください。※ご希望に添えない可能性もございます。予めご了承ください。

回答を入力

Q7.　今回の成果報告会の「開催時間」についてご意見をお聞かせください。

	1	2	3	4	5	
所要時間が短すぎる	○	○	○	○	○	所要時間が長すぎる

Q8.　今回の成果報告会の「開催日」についてご意見をお聞かせください。（複数回答可）

- □ 1. 平日の開催が良い
- □ 2. 土日祝日の開催が良い
- □ 3. 午前の開催が良い
- □ 4. 午後の開催が良い
- □ 5. 夜の開催が良い

Q9.　今回の成果報告会の「開催形式」についてご意見をお聞かせください。

- ○ オンライン開催が良い
- ○ リアル開催が良い

Q10.　今回の成果報告会の「プログラム内容」についてご意見をお聞かせください。（複数回答可）

- □ 1. 観光庁の方針を示してほしい
- □ 2. 有識者や専門家の話を聞きたい
- □ 3. より多くの実践例を知りたい
- □ 4. モデル事例について詳しく知りたい
- □ 5. 参加者自身も考える機会がほしい（ワークショップ等）
- □ 6. 登壇者や参加者と自由に意見交換したい（少人数ごとの意見交換等）
- □ 7. ネットワークづくりができる場がほしい
- □ 8. 小規模開催にし、地域により密着した内容にしてほしい
- □ その他:

Q11.　その他、全体を通してご意見等がございましたらご回答ください。

回答を入力

Q12.　ご自身について教えてください。《年代》

選択

Q13.　《業種》

選択

Q14.　《所属属性》

選択

Q15.　《お住まいの地域》

選択

Q16.　Q15で「日本国外」とご回答された方は国名をご記載ください。

回答を入力

～ご協力ありがとうございました～
未来の観光人材育成事業 事務局
（株式会社日本旅行　公益法人営業部内）
担当：市川・高坂・寺田
〒160-0017　東京都新宿区左門町16-1　四谷TNビル4階
Email：mirai_jinzai@nta.co.jp
営業時間：平日 09:45～17:45（土・日・祝日は休業）

3. 参加者アンケート

参加者アンケート結果

（1）参加申込者の参加理由と業種 ※参加申込時に取得したデータより分析

参加申込時に成果報告会への参加理由を選択式の質問事項として設けたところ、「観光教育の実践例について知りたい」と「観光振興の観点から観光教育に関心がある」が最も多く、次に「観光人材育成の観点から観光教育に関心がある」、「観光ビジネス科目実践の参考にしたい」「産学連携の手法や取組を知りたい」と続いた。（表①参照）参加申込者の業種としても、「旅行」「教育・教育学習支援関係」「公務員（教員を除く）」が全体の約7割を占めた（表②参照）。

項目	件数	%
1. 既に観光教育に取り組んでおり他地域の事例を参考にしたい	46	12%
2. これから観光教育に取り組みたい	16	4%
3. 観光人材育成の観点から観光教育に関心がある	57	15%
4. 教育的意義の観点から観光教育に関心がある	36	10%
5. 観光振興の観点から観光教育に関心がある	50	13%
6. 観光教育の実践例について知りたい	54	15%
7.「観光ビジネス」科目実践の参考にしたい	27	7%
8.「総合的な探究の時間」の参考にしたい	16	4%
9. 課外活動の参考にしたい	4	1%
10. 教育旅行誘致の施策に役立てたい	15	4%
11. 産学官連携の手法や取組を知りたい	34	9%
12. 関係者が登壇している	18	5%
その他	4	1%
	377	100%

▲表①（複数回答）

項目	件数	%
旅行	42	32%
教育・教育学習支援関係	42	32%
公務員（教員を除く）	20	15%
その他	14	11%
コンサル・会計・法律関連	2	2%
人材サービス	2	2%
放送・広告・出版・マスコミ	1	1%
卸売・小売業・商業（商社含む）	1	1%
飲食店・宿泊	1	1%
金融・証券・保険	1	1%
医療	1	1%
学生	1	1%
運輸	1	1%
自動車・輸送機器	1	1%
全体	130	100%

▲表②

3. 参加者アンケート

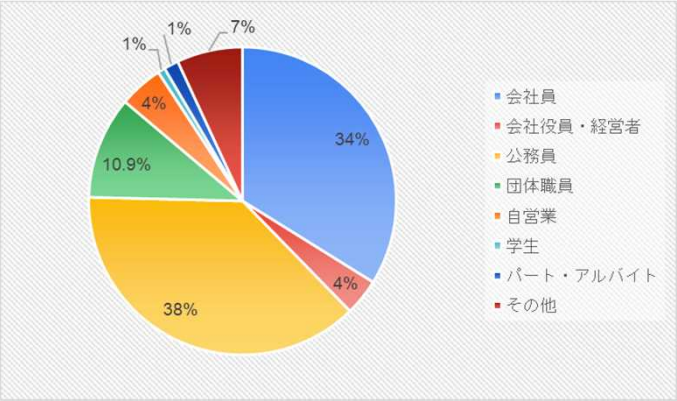
参加者アンケート結果

（2）参加者の属性

事前の参加申込者数323名のうち、269名が成果報告会に参加した。（アンケートに回答したのはそのうち130名）参加者の年代は、50代が最も多く38%となり、次に40代28%、30代15%と続いた。(表③参照) 意思決定者である管理職層からの参加が多かったことが推測され、観光教育を推し進めるための方向性や参考事例への関心が高かったことが伺える。参加者の所属先は、企業関係者38%、公務員38%が合わせて76%と大部分を占めた(グラフ①参照)。参加者の業種に関しては、旅行32%、教育・教育学習支援関係32%、続いて公務員が15%であった。観光教育の実施主体に関連のある業種から主に参加があったことが推測される。参加者の居住地域は、モデル地域である石川県と熊本県、首都圏が中心となったが、いずれの地域からも参加を確認できており、地域を問わず広く全国から注目されていることが伺える。また、アンケートの自由記述から、「学校の事例紹介や考え方等含め非常に参考になった。」「自地域・自校での取り組みを考える上で参考になった」という意見が複数あり、観光教育への関心が高く、自身の活動に活かすことを目的とした参加者が多くいたと考えられる。

項目	件数	%
10代	0	0%
20代	10	8%
30代	20	15%
40代	36	28%
50代	49	38%
60代以上	15	11%
	130	100%

▲表③



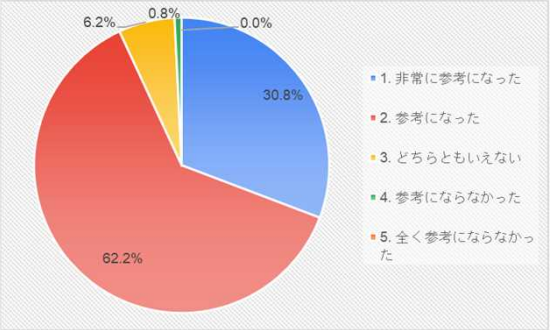
▲グラフ①

（3）印象に残ったプログラム・全体の満足度

参加者の印象に残ったプログラムについて、表④にまとめた。モデル地域成果報告②（熊本県）への印象度が最も高く、次にモデル地域成果報告①（加賀市）と続いた。コメントからは、「生徒や先生の具体的な取り組み（構成人員や実践方法など）が参考になった」等の意見が多数確認できた。このことを踏まえると、参加者は自地域・自校に活用できる具体的な事例の共有を求めており、観光教育への認知を高め、今後の活動を促進するためには、地域の多様な関係者と連携した様々な取組を積極的に紹介していくことが重要であると思われる。アンケート回答からは、本事業のモデル校や地域との交流を希望する意見もあり、登壇者への質疑応答や、参加者同士で意見交換できる場を組み込むことも効果的であると考えられる。「今回の成果報告会の内容が自身の活動において参考になったか」については、「非常に参考になった」「参考になった」を合わせると93%となり、成果報告会全体の満足度は大変高い結果となった。コメントについても「実際にゴールを見据えた実践内容がとても参考になった。」等、肯定的な意見が多く見られたことを踏まえると、次年度以降も同様の場を作り、情報発信や事例共有を行う機会を提供することで、観光教育への理解が深まり、各地での取組実践に繋がると考えられる。

項目	件数	%
1. 観光庁挨拶・事業概要説明	25	8%
2. 地域における観光教育実施のポイント（事務局・日本旅行）	58	20%
3. モデル地域成果報告①（加賀市）	79	27%
4. モデル地域成果報告②（熊本県）	94	32%
5. モデル地域によるパネルディスカッション	35	12%
その他	4	1%
	295	100%

▲表④(複数回答)



▲グラフ②

Ⅳ　令和3年度制作「観光教育プログラム」の改善

今年度は令和3年度に観光庁が制作した「観光教育プログラム」を実施校にて活用することで授業を進めた。活用した中での気づきや改善点についてモデル校の教員及び地域・観光関係者より報告いただき、リバイス案をまとめた。

➢ 観光教育プログラムとは

観光庁が令和3年度事業にて制作した、観光教育実施のための教材。以下3点。

・観光教育カリキュラム　高校生を未来の観光プロデューサーに！
・観光コンテンツ開発カリキュラム　ワークブック
・観光コンテンツ開発カリキュラム　授業準備・実施方法

➢ 指摘事項

■　モデル校教員

＜授業での使用について＞

・観光に興味を持つきっかけづくりの手法が知りたい
・年度途中からでも参考にできるよう、観光教育を推進するうえで特に重要なポイントを示してほしい
・ワークブックのほかに、授業で活用可能な教材があるとよい
・理解を深めるための問いを設定することで生徒が主体的に取り組める内容にしてほしい
・授業を通して目指すべき姿等、ゴール設定に役立つ情報がほしい
・イラストや写真等、視覚的にわかりやすいワークブックの方が生徒の理解が進みやすい

＜地域連携について＞

・産学官連携を推進するためには、月1回の定例ミーティングを設ける等、定期的に関係者が集まる場を作った方が良い

＜その他＞

・カタカナや学校現場では普段目にしない用語が多く読み進めるために時間を要する

■　地域・観光関係者

・学校が求める情報が示されていると連携が図りやすい

リバイス

➢ 主な変更点

1．「観光」の説明を追記

従来のワークブックは、観光に対する興味・関心や知識があることを前提とした構成になっていた。今年度事業を通じて、通常は授業で観光を取り扱っていない普通科高校でも使用することを想定し、観光とは何か、また、時代ともに変わりゆく観光のトレンドについて説明することで、学びの入口として、まずは観光に対する関心を持ってもらえるよう修正を行った。

2．授業の進行方法の修正

グループワークの活動内容として、新たな観光コンテンツを考えることをテーマとしている。従来版では、地域に関する下調べの時間がなく、企画立案からグループワークがスタートしているが、地域の観光資源や主な観光客層等を理解したうえで新たな観光コンテンツを検討した方が、より具体的な企画立案につながるため、地域について学ぶステップを追加した。

3．用語の平易化

ビジネスで用いられる用語が多く使用されていることから、生徒にとっては読み進めることが難しいと感じる場合もあるため、学校現場で使用される言葉に言い換える、又は、説明文を追記した。

Ⅴ　総括

1. 事業の成果

事業の目的（再掲）

今後、観光産業を我が国の成長に資する基幹産業とし、さらに高いレベルの観光立国を目指すためには、人材の育成・確保が不可欠である。そのためには成長の早期の段階から、日本及び地域への愛着と誇りの醸成を図るとともに、旅や観光の意義についての理解を深め、次世代に対して観光への興味・関心を広く喚起することが重要である。

これまで観光庁では、総合的な学習の時間を想定したモデル授業の構築（2017年度）や、教員向けの啓発動画の制作（2018年度）、小中学校の社会科の授業を対象とした観光教育の学習指導案の作成（2019年度）、初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会の開催（2020年度）等を実施してきた。さらに、2021年度には、高等学校向けの観光教育プログラムを開発し、3校で実証を行った。

2022年度は新たに「観光ビジネス」科目が高等学校商業科に導入され、高等学校における観光教育への注目が更に高まっている。高等学校の教育現場において魅力的なコンテンツを提供すると共に、学校だけではなく地域も一体となった観光教育の在り方を検討する必要がある。

本事業では、学校現場において、学外（地域、企業、大学等）とつながりを持ち、指導者の知識やノウハウの有無を問わず、広く、誰もが積極的に観光教育に取り組めることを目指し、教育コンテンツの実践と産学連携の基盤モデル構築を行い、観光立国を支える人材の裾野を拡げることを目的とする。

事業の成果

上記の目的を踏まえ、本事業の成果を以下の通り整理した。

1．地域における連携体制の構築

本事業では、自分たちの住む地域の魅力を再発見し、高校生の目線で地域内外にその魅力を伝える取組を行った。各地域において、教育界、産業界、行政それぞれの協力を得ることができたのは２つの要因があったと考えられる。１つは地域の未来を担う高校生が自地域の観光について主体的に学ぶことで、若者の地域定着、将来的な観光人材確保、高校における学びの魅力化等、持続可能な観光地域づくりへの効果が期待できる取組であったことである。もう1つは、産業界、行政の協力要因であるが、誘客のための広報や関連ツールの制作といった、通常、これらの主体で行っている業務の延長線上にある取組であったことで、大きな負荷なく協力することができた。観光産業は外部環境の影響を受けやすく、トレンドの変化のスピードも早い。そのため、消費者のニーズを的確にとらえる必要があり、高校生の斬新な意見は、地域の観光産業を担う主体にとっても新鮮であったと考えられる。

各モデル校においては、地域の様々なステークホルダーの協力の下、フィールドワークや授業を行ったことで、より実践的に地域の観光を学ぶことが出来た。また、その学びをプロモーション映像や記事等の情報発信コンテンツにアウトプットすることで、生徒たちのモチベーション維持・向上にも繋がったと考えられる。こうした生徒たちの熱意ある姿勢が各関係先にも伝わり、地域における観光教育実践のための有機的な連携体制を構築することができた。

2．地域への愛着と誇りの醸成

今回、地域内外への魅力発信を考える中で、自分たちの住んでいる地域の歴史、特色、魅力を調べ、効果的に発信できるよう言語化する作業を行った。また、制作した映像や記事を学外の人にも見てもらうことで、様々なフィードバックを得ることができた。この経験は、高校生にとって地域の魅力を改めて知り、新たな気付きを得るきっかけとなった。加賀市の伝統産業や、熊本の雄大な自然は住んでいる高校生にとっては、日常のありふれた景色であるが、観光客にとっては非日常であり、魅力的なものである。今回の取組を通じて観光客が自地域に興味を持つ姿、感動する姿を想像することで、この魅力ある地域の構成員としての自覚が芽生えたのではないだろうか。

2019年スタートしたGIGAスクール構想により生徒はICT端末を使い様々な情報発信を行う授業を受けている。地域の魅力を高校生が主体的に発信していくことで、多くの人々の目に留まる機会を創出し、交流人口や関係人口拡大につながり地域に活力を与える。おのずと、地域の協力者が増えていき、高校生が地域活動に参画し、学校が地域のハブとして機能し始めている。このように地域と学校がより近い存在になっていく過程で、高校生に地域への愛着が芽生え、シビックプライドが醸成される取組であったと考えられる。

1. 事業の成果

3. 主体的に地域課題の発見・解決ができる人材育成

高校生がこの活動に主体的に取り組めるように、取組テーマを彼ら自身に馴染みのある「教育旅行」とした。既に小学校、中学校で教育旅行を経験しておりイメージがつきやすく、考えやすい。自分たちの感覚と重ね合わせることもできる。また、昨今の高校教育旅行は探究型学習の一部として捉えている学校も多く、ＳＤＧｓの視点から地域課題解決を学ばせる傾向があるため、それに対応できるようテーマ設定を行った。

今回、教育旅行で学ぶテーマを、加賀市は「伝統産業・地域文化の継承」、熊本県は「豪雨被災地からの創造的復興」とした。テーマは事前に事務局およびモデル校と協議の上で設定したものであったが、授業の実施過程において、地域の方々とコミュニケーションが増えるにつれ、主体的な取組へと変化していった。魅力発信のための映像、記事制作においては、地域の観光関係者のみならず、同世代からの感想も踏まえ、より高校生が訪問したくなる魅力ある観光プロモーションとなるよう、主体的に取り組んだ。

教育旅行は計画から実施までの期間が長い事業であり、今回の高校生たちの取組によって、実際に地域の観光課題に効果が現れるのはまだ先となる。今後、本事業における各種の制作物を見た学校が実際に地域を訪れ、彼らからフィードバックを得ることで、新たな課題発見につながり、より魅力のある観光プロモーション、観光開発がなされることが期待される。今年度の取組においては、地域と学校が連携を図りながら、高校生が主体的に地域の観光に関する課題の発見と、それらを解決するための取組を繰り返すことで、課題解決能力が養われ、地域に貢献できる人材の育成に繋がった。同時に観光産業への興味・関心が高まり、観光人材の裾野の拡大に寄与した。

2. 事業の課題と解決策

本事業を踏まえた課題と解決策について、以下の通り整理した。

地方自治体

1．観光人材育成プランの策定

これからの観光を担う人材育成は、地域づくりを推し進めるリーダーシップや国際的な視野を持つことが重要で、多様なスキルが求められる。地方自治体においては地域の課題に長期的な視野で取り組み、未来の地域や観光を支える人材の育成・教育について、主体的に検討することが必要である。また、高等学校の商業科において「観光ビジネス」が科目として新設されているため、今後は、教育機関とも連携しながら観光人材の裾野を広げ、育成をサポートしていくことが重要となる。
なお、観光人材の育成は投資的な側面が大きく息の長い取組であることから、行政からの継続的な支援が期待される。

2．学校との連携

行政から学校に対する支援の手段として、自治体における各種のデータ、観光行政の現状等の情報提供や、これらを扱った出前授業の実施、生徒との意見交換、地域の各関係者との繋ぎ役、取組そのものの広報等が挙げられる。１で挙げた通り、持続可能な観光地域づくりのため、行政自らが主体的に観光教育に取り組むと共に、連携の第一歩として学校から連絡がしやすいよう、門戸を開いておくことが大切である。具体的には、観光教育に関する窓口を設ける、もしくは専門の窓口でなくとも学校側がどこに連絡すればよいかを明示しておくとよいと考えられる。

３．観光教育を進める上での予算措置の検討

「観光」を学ぶ上で地域の観光事業者との交流、実地体験は、生徒の学びを深める上で大変重要となる。しかし、学校が使える予算は限られているため、地域の観光事業者をはじめとした学外関係者のサポートが自ずと必要になる。参加生徒が少人数であれば、インターンシップ等で受入れを模索すればよいが、十数名で授業を行う場合は、受け入れ調整が難しいケースも予測される。観光事業者にもメリットがあるような制度構築もしくはビジネスが成立するよう、地方自治体として予算措置を検討することも一案として考えられる。

学校/教員

1．教員同士、または外部との連携

観光産業は裾野が広く、関連する業種業態が多岐にわたるため、学校教員はどのような内容を授業に取り入れ、生徒に取り組んでもらうか、判断に悩むこともある。また現状は、教員個人のマンパワーにより外部との連携や授業の取組が進められていることが多く、負担が大きい。外部連携先の調整や、複数名の教員による実施体制を整えるなど、学校全体として取組を後押しすることが求められる。なお、外部連携先については、自治体観光課、地域のDMO、観光事業者のほか、卒業生との連携も有効である。併せて、学校や地域を越えて、観光教育に取り組む教員同士がその手法や取組について情報交換できるような機会を設けることも必要である。

2．既存教材の活用

今年度は観光庁制作の観光教育プログラムを活用して授業を実施することを推奨したが、地方自治体においても観光教育に係る副教材等の冊子を制作している場合がある。観光教育においては、自地域の観光資源や観光政策を取り扱うことが多いため、自地域でもこうした冊子を制作しているか確認するとともに、観光庁制作のプログラムも活用し、各学校の環境や状況に合わせて、カリキュラムに合う部分を、効果的に授業に取り入れる等の柔軟な活用を検討されたい。
また生徒たちが学んだことを発表したり、地域において実践したりする場や、取り組んだことの効果検証の機会があると、取組がより実践的になり、生徒の意欲向上にもつながる。これらの場を積極的に設けることが重要である。

2. 事業の課題と解決策

DMO・観光協会、地域事業者

・観光産業をはじめとした地域の発展を支える人材の育成
　地域の観光を牽引するDMO、観光協会、地域の各事業者にとっては、未来を担う観光人材の育成・確保は喫緊の課題である。組織の特性上、収益に繋がらないと受け身且つボランティア的な関わりに留まってしまいがちであるが、観光教育はまさにこうした人材の裾野を拡げ、未来の観光人材の基礎を作る取組であることから、将来を見据えた投資として、経済的、人的サポートをはじめ能動的に取り組むべきである。

共通

・イニシアティブを誰がとるか
　産学官で連携し、観光教育を推進するためには、誰が主導権を握り各所との調整を図るかが重要である。本事業においても、各モデル地域によって連携体制や取組のアプローチが異なったように、適切な連携方法は地域の特性や実情によって大きく異なる。相互の目的を理解し、学校、地方自治体、もしくはDMOや観光協会を含む地域事業者等において主導者を検討し地域連携を行うことが重要であると考えられる。

➢ さいごに

　観光教育を推進するためには、教育現場のモチベーションを維持・向上しながら、複数年にわたって地域の観光開発に参画する企業と人（コーディネーター）が関わり合いを持つことが重要である。企業は、短期的な視点や、一過性の出来事として観光教育に向き合うと、ボランティアの延長線上の活動に終始することが予測され、取組の加速化に不可欠となる他の関係者との連携体制を構築することも難しい。連携を調整する中核を地域のDMOが担うことができると推進が円滑に進むと思われるが、人材・資金ともに余裕のあるDMOはほんの一握りである。今後、観光教育を推進させていくためには当面、地域の公的機関である自治体とDMOが協働しながら、教育旅行を中心に教育現場と関わっている旅行事業者や、観光業に携わる卒業生にも協力を仰ぎ、幅広い主体が連携する仕組みを構築していくことが求められる。
　観光の視点で地域を学ぶことは、高校生が楽しみながら地域への理解を深め、身近な地域の魅力を再発見することに繋がる。地域愛が育まれることにより、新たな課題解決意識が芽生え、解決手段を自分ごととして考える生徒が増えることも期待される。それに伴い、地域へのエンゲージメントも向上する可能性が高い。地域の未来を担う若者が、観光業に魅力を感じ、観光地域づくりに貢献することも期待できる。
　先に挙げた今年度事業の成果と課題、解決策を踏まえ、今後は、日本全国の各地域において地域関係者が一体となり、若者をはじめとした住民全体を対象として、主体的に観光教育に取り組むことが重要である。

Ⅵ 若旅★授業の実施

1. 概要

近年、若者の旅行離れ、特に海外旅行の関心低下に関するさまざまな指摘がなされているが、一般的に「旅をすること」は自己を見つめ直して成長したり、旅先の地域の魅力に触れることで、様々な気付きや学びを得られる大切な経験といえるだろう。また、若者の旅行促進を図ることは、現在および将来の旅行市場を維持・拡大するという観点からも重要な取組といえる。観光庁は、若者向けに旅の意義・素晴らしさを伝える若旅★授業を平成25年2月より実施している。若者の旅行振興およびアウトバウンドの活性化とともに、将来の日本を担う世代の国際感覚の涵養および相互理解の増進を図るものである。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、直近の数年間は、東京都内の高校での実施が中心であるが、東京都以外の地域からも開催を望む声が挙がったことから、今年度は宮城県仙台市と福岡県福岡市の2校においても開催した。

■授業実施の流れ

学校から観光庁へ申込

・学校から観光庁へ電話、メール等で申し込み。
・今年度は、東京都「都立高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事業」を通じて申込のあった学校での実施を中心に、地方でも2回の授業を行った。

↓

学校側へのヒアリング
・講師
・開催時期
・授業内容等

・申込のあった学校にヒアリングシートを送付し、講師、開催時期、授業内容等の希望を確認する。
・事前に当該授業の講師として登録をしている方の一覧から事務局が派遣講師を検討する。

↓

授業内容の準備・調整
・講師との調整
・観光庁との情報共有

・ヒアリングシートの回答内容に合わせて、講師のスケジュールおよび実施する授業内容の調整を行う。
・調整事項について、観光庁に情報を共有し、発表資料も事前に確認を依頼。

↓

若旅★授業実施
・アンケート実施
・履行証明書の回収

・授業終了後、生徒と先生向けのアンケートをそれぞれ実施する。
・当日は履行証明書に実施校の教員から署名をいただき、履行証明書の回収をもって対応完了とする。

↓

効果検証、事後対応
・アンケートのとりまとめ
・講師への旅費、謝金支払

・回収したアンケートは授業の効果を適切に把握するため、観光庁に提出。
・次回の授業に役立てていただくため、講師にも内容を共有する。
・授業終了後、授業実施にかかった旅費と併せて講師に謝金を支払う。

2. 実施内容

授業実施校一覧

事務局が本事業を受託した後に開催した若旅★授業は以下の15校であった。東京都内の13校を中心とし、地方での開催として、宮城県仙台市と福岡県福岡市の2校を実施し、合計15校において若旅★授業を行った。

No.	若旅授業実施回数	学校名	地域	授業テーマ
1	110回目	東京都立飛鳥高等学校（定時制）	東京都	文化の違い
2	111回目	東京都立世田谷泉高等学校	東京都	世界一周旅行について旅の魅力
3	112回目	東京都立向丘高等学校	東京都	世界一周旅行について
4	113回目	東京都立上水高等学校	東京都	旅行記
5	114回目	東京都立板橋有徳高等学校（定時制）	東京都	世界一周旅行について
6	115回目	東京都立大森高等学校（定時制）	東京都	世界一周旅行について
7	116回目	東京都立野津田高等学校	東京都	旅で感じたこと・人生を生きていくヒント
8	117回目	東京都立成瀬高等学校	東京都	文化の違い
9	118回目	東京都立竹台高等学校	東京都	旅行記
10	119回目	東京都立砂川高等学校	東京都	旅行記
11	120回目	東京都立神代高等学校（定時制）	東京都	旅の魅力
12	121回目	東京都立北豊島工業高等学校（定時制）	東京都	文化の違い
13	122回目	東京都立竹台高等学校	東京都	旅行記
14	123回目	仙台白百合学園高等学校	宮城県	世界を舞台にする選択肢
15	124回目	筑陽学園高等学校	福岡県	世界一周旅行について

2. 実施内容

地方開催

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、直近の数年間は、若旅★授業を東京都内で主に実施してきたが、東京都以外の地域からも開催を望む声が挙がったことから、今年度は宮城県仙台市と福岡県福岡市の2校においても開催した。講師を派遣する際には、派遣先の地域に知見のある講師をマッチングし、参加校との調整を行った。地方開催にあたっては、今年度の事務局が旅行業者であったことから、教育旅行の企画運営で既に繋がりのある高校に声掛けを行った。事業趣旨を説明し、関心を寄せていただいた高校を実施校として調整を行った。開催校2校の詳細は下記の通り。

■2023年1月18日(水)　仙台白百合学園高等学校

・参加生徒の学科：普通科
・参加人数：12名
・授業の枠組：総合的な学習（探究）の時間
・参加校の意向：
-探究学習で、他地域に伝えたい宮城の魅力を考える取組を行っている。海外での経験が豊富な講師に自身の体験を話してもらうことで、旅行者の視点をもつことの大切さに気付く機会としたい。また、生徒自身の海外経験、海外旅行への興味・関心を喚起したい。
-探究学習の一環で外部講師に講義をいただくため、生徒との意見交換の時間を設けたい。
・担当講師のテーマ：
「世界を舞台にできる人とは？柔軟性と臨機応変力、他を許容する力を養う」
・実施校からのコメント：
-様々な国への訪問経験のある講師から、旅を通じて気付いた観光地の工夫、柔軟な思考、旅の楽しさ等を話してもらうことで、今後の探究学習を進める上での意欲向上に繋がったと感じた。

■2023年2月28日（火）筑陽学園高等学校

・参加生徒の学科：普通科（各進学クラスの混在）
・参加人数：20名
・授業の枠組：総合的な学習（探究）の時間　※ニュージーランド語学研修の代替授業
・参加校の意向：
-事情があり語学研修に参加できなかった生徒の学びの機会とすると主に、次年度の探究の授業における取組の参考にしたい。
-スポーツに力を入れている学校のため、参加生徒も海外スポーツへの興味が深い傾向がある。授業を通して、スポーツ以外の分野においても興味を持ってもらいたいと考えている。
・担当講師のテーマ：
「人生に野望を持とう」 ～一歩踏み出し、自ら経験することの大切さを学ぶ～
・実施校からのコメント：
-海外スポーツを通して既に海外への興味は多少あったが、講師の体験談を聞くことで、海外のより細かい文化や環境等、学校の授業では学習できないことを知ることができ、新たな興味を醸成することに繋がった。

■地方開催の成果と改善点

-地方の学校では外部講師による授業が非常に少ないため、旅の楽しさや、海外への関心を高めるきっかけとして、有意義な時間となったとの声をいただいた。
-学校側からは一回の授業だけではなく、複数回にわたって実施する授業プログラムを行いたいとの声があった。
-地方開催は、講師のスケジュール確保が難しく、早い段階での調整が必要であった。前広に調整を進めていくことを意識し、講師・実施校との連絡を円滑に行うことが求められる。

3. 総括

授業実施における課題、改善策・今後の展望

➢ 課題

1．講師の首都圏集中を緩和する

今年度は首都圏以外の都市でも開催を行ったが、若旅★授業の登録講師は首都圏に生活拠点を置く講師が多いため、地方開催においては、開催地域に縁のある講師を首都圏から派遣した。しかし、遠方に講師を派遣するにはスケジュール調整や旅費の確保等に課題が残る。今後も地方開催を継続し、広く全国各地で若旅★授業を推進していく際には、首都圏以外の地域に生活拠点を有する講師も積極的に登録していただく必要がある。

2．参加生徒の主体的な学びを促進する工夫を行う

現在は講義スタイルで旅行の素晴らしさ、特に海外での旅行体験を語る授業を実施しているため、参加生徒が自ら能動的に学ぶ機会が限られている。双方向の意見交換の場を設ける等の工夫を行うことも検討したい。

➢ 改善策・今後の展望

1．全国で実施するための仕組みづくり

若者の旅行離れは首都圏に限った課題ではないため、広く全国各地で実施することが求められる。しかしながら、前述の通り、首都圏を生活拠点としている講師を全国に派遣するには、旅費等の課題が残る。そこで、首都圏を拠点とする講師だけでなく地域ごとに、若旅★授業の講師の登録を増やす必要があると考えられる。そのためには、各地方運輸局や全国の自治体等を通して、若旅★授業の取組をなるべく広く周知し、その趣旨に賛同してくれる協力者を増やし、新たな講師登録に繋げることが重要である。また、現在は教育現場でもICT化が進んでいるため、オンライン授業の実施など、開催形態を工夫し、積極的に地方部においても若旅★授業を推進していく必要がある。

2．授業形態の多様化を検討する

現在の若旅★授業は、主に、講師が参加生徒に一方的に話す講義スタイルで実施されている。複数クラスの生徒が参加する大教室での授業実施も多いため、そのような場合には現行のスタイルが現実的であると考えられる。しかしながら、学校によっては、双方向でのコミュニケーションや生徒の主体的な学びを重視する場合もある。その際は、講師との意見交換の場を設ける等、学校の意向によって柔軟な授業形態をとることも必要である。

➢ さいごに

新型コロナウイルスの感染拡大により、直近の数年間は海外への渡航が制限され、日本国内を訪れる外国人旅行者も減少していたが、状況も変わり、徐々に人の往来も活発になっている。今後ますます増えることが予想されるインバウンド需要に対応するためには、若者の国際社会における異文化理解や、グローバルな視点を育むことが重要であり、アウトバウンドの活性化を両輪で進めていくことで、相互理解が深まり、更なる観光交流の活性化が期待できる。若旅★授業はまさにこれらに寄与する取組であることから、全国各地に若旅★授業の取組を拡大し、継続して実施することが重要である。